

俳句雜誌

令和六年一月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十七卷第一号

水 明

2024 1月号



信 風 節 季



新年おめでとう

ございます

本年もどうぞよろしく

令和六年新春

主 宰 山本鬼之介

水 明

第1120号

— 華の一句 —

カウベルをつけてもみたき熊の首

原 田 秀 子

今年、熊による人的被害が三年前の記録を抜いて過去最多になった。記録、死者も数人出ている。気候変動による主要な餌である団栗の減少の他に、熊の棲息範囲の拡大や、狩猟者の減少などにも起因する熊の生息数の増加、など、熊と人間との接触の機会が増えていることが原因として、熊の首にカウベルを付けて、扱き、熊の首にカウベルを付けてみたら、という大らかな俳句である。

(鬼之介・推薦)

水 明

令和 6 年

1 月 号

今月のかな女

華の一句

雅 楽 (作品)

畠 島 (近詠)

功 の 末 (近詠)

百尺竿頭 主筆作品の鑑賞

ゆずり葉 季音月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

『水明誌』を繙く

「音なの 俳句」

現代俳句鑑賞

十二月号の巻頭句

俳誌望見

山本鬼之介

大橋廸代

星野和葉

五明 昇

檜鼻ことは

山中みどり 柚木治子
由良ゆら女 ほか

松井由紀子 正木萬蝶
梅澤佐江 ほか

原田秀子 染谷風子
横山君夫 ほか

関根誠子

堀田季何

網野月を

染谷風子

1

4

6

7

8

10

12

19

24

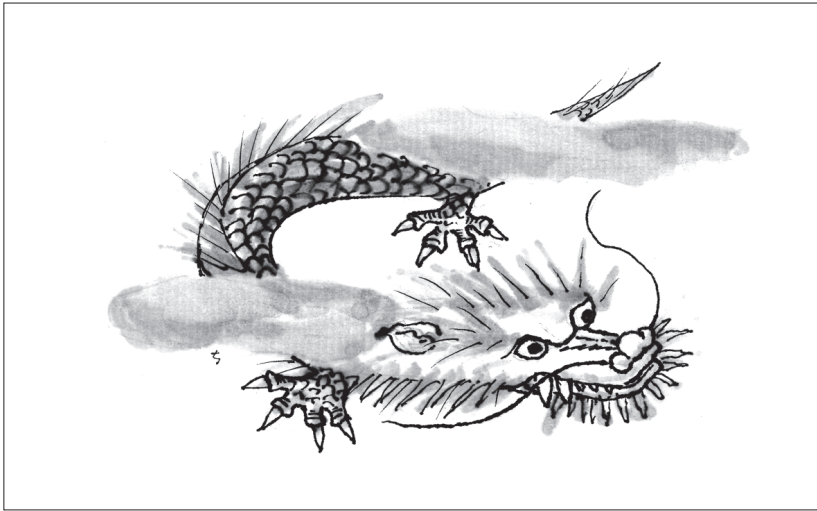
29

30

38

40

41



水明集

岡田宣子 反町 修
菅原真理 ほか

水明集作品評

山本鬼之介

水琴窟 (水明集十一月号鑑賞)

池田雅夫

鼓笛集

曲淵徹雄

句集喝采

山本鬼之介

山紫集

山本鬼之介

水明の記事他誌転載

山本鬼之介

ストップ片仮名の乱用

青木鶴城

はじめての俳句教室懇親会

青木鶴城

水明例会報・各地句会報

74・77

新珠賞作品募集

77

新春俳句大会・水明忌のお知らせ

77

「例会・句会指導者および幹事会」のお知らせ

77

風声・発展基金御礼

77

運営組織

77

令和六年主要年間行事予定

77

水明例会・句会・教室のご案内

77

後記

77

題字：長谷川かな女 表紙：内田恵子 カット：福田千春

雅
樂

山本鬼之介

道端の地蔵に謂れ木の葉散る

檻越しに月輪熊の月を視る

小夜しぐれ竹人形をつくる家

爛酒や座布団背負ひ隠し芸
三絃の三種みの調べ大旦
瑠璃引の「鹽」の看板空つ風
その景色秘めたる雪見障子かな
序の舞の摺り足潜む冬座敷

島 島

大橋 迪代

冬の波浴びねば着けぬ無人島
上陸の蹠にへこむ冬渚
冬蜘蛛の囿をはらひつつ分室へ
板書冴ゆ半世紀経し絵地図とや
蔓荊や拾ひし貝の名教へあふ
転石をめくりて悲鳴イソ海鼠
ずぶ濡れのわれらに瞪る槽の河豚

「『島島』レアな観察いかが」のタイトルに惹かれ応募。当選の20名に入った。

当日、白浜の京大瀬戸臨海実験所の講義室で50名余りの応募者と聞きびつくり。

一時間の講義のあと島島へ出発。小型の舟に12名、合羽を着たが折からの強風で鳩尾まで流れる波しぶき、帰りは舳先からの大波しぶき攻めで目も開けられず、下着まで濡れて笑うほかなかった。午後は水族館を自由見学し、千年鯛や白海蛇など堪能した。勿論無料。

功の末

星野和葉

引き合へり月下美人と今日の月
点滅の機影低空星月夜
奏者への拍手なほ手に冬の月
有明の月に見参甲斐ありて
これ程の闇は無からむ朝月夜
シリウスや外にも出でよと誘はれ
街灯に衣かけたし冬の星

大分遅れて季節はずれの月下美人が咲いた。丁度、中秋の名月だったが雲が一寸気になった。月が中天に懸かった時、薄い雲がすうっと流れ、満月が現れた。どきっとするほど胸が高なつた。空と庭で月と月下美人がお互いに称え合い、引っぱり合っている様に見えた。こんな偶然があつていいのだろうか。

その日から月が気になり「月の満ち欠けの図」と夜空を合わせ見る様になった。仲々難しいものである。そんな或る日の夜中、四時頃だったろうか、思い切つて外に出てみた。又々びっくり、すばらしい弓張月に出合つた。寒さにめげず外に出た甲斐があつた。

百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五明昇

十月号

元の鞘に収まるふたり佞武多の夜

八月初旬、高さ二十メートル、重さ十六トンという巨大な山車が力強いお囃子と「ヤツテマレ」の掛け声のもと、市街地を練り歩く。「五所川原立佞武多」は弘前市の扇ねぶたととも青森市の人形ねぶたととも違う独特の様式を今に伝える。迫力ある祭りと優美に点る立佞武多の絶妙なバランスに、喧嘩別れの二人もじっくりと元の鞘に収まる夜となった。

去りぎはに小節きかせて法師蟬

法師蟬（ツクツクボウシ）の鳴き方は途中で曲調を変えたり、強弱をつけたりと、音楽的で情緒たっぷり。夏の終わりを告げる虫として、季節の移り変わりを表現するのにぴったりである。その法師蟬が去り際に小節を効かせるとは言い得て妙だ。「小節」は歌の中で節回しを強調するテクニクだが、小粋な法師蟬が次に向かう舞台は何処だろうか。

庭に八千草老いても可憐なるひとよ

秋の山野や路傍、庭に咲く名も無き秋草、その親しさや可憐さを込めた愛称が八千草である。宝塚歌劇団出身でテレビドラマ『岸辺のアルバム』などに出演し、幅広い役柄で親しまれた女優八千草薫が八十八歳でこの世を去ったのは二〇一九年十月二十四日。年齢を重ねても若々しさを失わない清楚なイメージは、今もファンの中の心に生き続けている。

星飛ぶや物干し台に隣るひと

かつて東京下町や地方都市でもよく見かけた「物干し台」は、庭干しやベランダに取って代わられ、今では懐かしい風景となった。夕暮れの町並みを眺め、美しい夜空を見上げ、幸せを願い、叶わなかった夢を語る場所でもあった物干し台。そう言えば流星の飛ぶこんな夜、隣の物干し台に佇んでいたあの人はその後どうなっただろうか。

銀漢や小塚原はこの辺り

小塚原刑場は、鈴ヶ森刑場（品川区南大井）、大和田刑場（八王子市大和田町）と並ぶ三大刑場で、江戸時代から明治初期にかけて磔刑・獄門など合計二十万人以上の罪人の死刑が執行された。刑場跡はJR常磐線南千住駅西側にある延命寺境

内一帯。銀漢が夜空に映える頃、列車がこの辺りに差し掛かると、過ぎし世の歴史の折節に感慨もしきりである。

十一月号

深窓に御簾のごとくや秋すだけ

秋になってなお日射しを避けて吊られている色寂びた秋簾は風情があるが、玄関先や居間の入口に掛ける簾は「立ち隠れ」とも呼ばれ、目隠しや訪問者の確認の道具として便利に使われている。とりわけ奥まった場所に吊られた簾は、深窓の佳人を守る御簾のようでもある。御簾は神殿や宮殿などで用いられる高級な簾のことで、平安・室町の日本の歴史はほとんどがこの御簾の内で作られてきた。

ぬけぬけと一人三役村芝居

江戸時代、江戸や上方の歌舞伎が伝搬し、各地に町民自らが演じ、楽しむ「農村歌舞伎(村芝居)」が生まれ今も伝承されている。祭礼の前夜、神社の芝居小屋の前に町民みんなが集まり芝居を楽しむが、素人が「侍」や「町娘」に大変身、玄人顔負けの名演技が会場を沸かせる。それにしても臆面もなく一人で三役もこなす好き者がいるとは……。普段は静かな田舎町の東の間の賑わいを活写する一句だ。

桧皮剥ぐこれぞ故郷の黍嵐

桧の樹皮である桧皮(ひわだ)は屋根を葺く材料として神

殿・皇居などの建物に使われるが、桧皮を採取する職人の減少と高齢化が憂慮すべき状況となっている。その桧皮葺きの屋根を剥ぐほどの嵐はまさに烈風という他ない。黍嵐は黍畑を吹き抜ける強い風で、葉擦れの音、穂が触れ合う音に秋らしい趣きがあるとされているが、作者の故郷若狭には北陸特有の厳しい気象条件があるのだろうか。

秋うらら古美術商の鼻眼鏡

古美術は古い時代の書画・彫刻・陶磁器・家具などの美術品の総称で、美的鑑賞に重きを置いたものを言い、古美術商とはそれを売買する商人のことを指す。秋のうららかな日差しの縁先で、眼鏡を鼻先にずり落とした古美術商が、所在なさげに通りを眺めている。この仕事に必要なものは、骨董品の価値を見定める鑑定眼と取引相場に対する情報や知識だというが、その息の長い商売は筆者には到底務まらない。

真つ直ぐに引けぬ白線秋惜しむ

スポーツの秋には運動場や校庭に白線を引く機会が多いが、効率よく正確なラインを引くのはなかなか難しい。筑波大学附属小学校によると、①体を前に向けてラインカーを引っ張る②ラインの延長線上にある目標物を目指して真つ直ぐに歩く③ラインの長さは歩数で測る——などの工夫が大切だと云う。ちなみにライン引きに使われる白い粉には、現在では安全性を考慮して炭酸カルシウムが使われている。

ゆずり葉

◆季音十一月

檜 鼻 ことは

魚板 打つ音 新涼の 建仁寺

田寺 玲子

四条通より花見小路通を南へ下り、祇園甲部歌舞練場を過ぎると、やがて建仁寺の北門に至る。

祇園界隈の華やかな喧騒を離れ建仁寺の境内へ。法堂、方丈、本坊、書院は多くの観光客で賑わうが、三門、勅使門の辺りへ足を進めると行き交う人もまばらになり、禅寺の閑静な佇まいの中に身を置くことができる。

魚板は禅との関りが深く、禅宗の寺院では鳴らしものの一つとして用いられる。小ぶりの魚板は茶事にも用いられるそうだ。建仁寺では、栄西禅師の奉納茶会が二年に一度開催されておき、今年は十月三日に執り行われた。

新涼の建仁寺で聞く魚板の音、心を洗うような清らかな音であったことであろう。

秋の灯やルーペ片手に江戸古地図

丸山 マスミ

池波正太郎の「鬼平犯科帳」の舞台である本所・深川をはじめ、赤坂見附、紀尾井町、溜池山王、今戸、向島、浅草、蔵前、上野、本郷、小石川、日本橋、佃島、番町、麻布など、東京には江戸時代の地名がいまだに残る。

江戸時代の古地図と現代の地図を見比べながら東京を散策し、江戸の面影を探すのも楽しいことだと思いが、東京に住んでいるならいざ知らず、遠方に住む身では、なかなかそういう時間も余裕もとれない。それでも、古地図を眺め、趣のある地名やその場所を辿ると江戸の街並みが何かしら想像でき、けっこう楽しいものだ。

詠者もルーペを片手に秋の夜長を楽しまれているご様子。江戸の古地図と池波正太郎の文庫本を片手に東京の街を歩くのが、実は一度やってみたかった私の願望のひとつなのだ。

鼻の差の写真判定天高し 近藤徹平

京都競馬場では「秋華賞」「菊花賞」、東京競馬場では「秋の天皇賞」など数多くの重賞レースが開催される秋。日本晴れの青空のもと、緑鮮やかな芝のコースは爽やかに美しく、競馬ファンならずともその美しさに競馬場が好きになる。

なかでも伏見の京都競馬場は、第三コーナーに「淀の坂」と呼ばれる登り坂があり、国内屈指の高速馬場として知られる。各馬がゴールを駆け抜け、鼻の差の写真判定。結果がでるまでの興奮冷めやらぬ時間が長い。

「生き物はみなそれぞれに美しい。だが、サラブレッドの美しさは、その底に、ある哀しみに似たものをたたえている不思議な美しさなのだ」とは、宮本輝の小説「優駿」にある言葉。勝ったもの負けたもの、皆それぞれに美しい。果たして夢は買えたのであろうか。

カフカを語る君を隣に天の川 石田慶子

カフカに魅かれてしまった。カフカとはフランツ・カフカのことであろうか。彼の代表作のひとつ「変身」は、「ある日の朝、平凡なサラリーマンのグレゴールが、ベッドの中で巨大な虫けらに姿を変えていた」そんな物語だったように思う。

虫けらが感じる自分の気持ちや他人に伝えられない恐怖、愛する人にさえ自分の言葉を理解してもらえない恐怖が綴られる不条理な物語である。

カフカと言えども一つ、村上春樹の小説「海辺のカフカ」があった。カフカ少年とナカタ老人のことが交互に語られるこれもまた不思議な物語。

さて、掲句のカフカはどちらのカフカなのであろうか。静かにカフカを語る君、そして夜空には天の川が美しく輝く。この句自体がひとつの幻想的な二人の物語のようである。

掌で量る鰯や朝市女 笹本啓子

旅先の旅館で朝市があることを知ると、これはもういそいそと出かけたくなる。全国津々浦々、いろいろなところで朝市が開かれているのであろうが、輪島の朝市がことのほか楽しかったことを思い出す。

朝市通りの露店には、とれたての海産物、野菜、民芸品などが所狭しに並び、おばあちゃんやおかあさんの掛け声が勇ましい。いつの間にか、通りは観光客や地元の人たちで賑わい、その場にいるだけで楽しくなる。

新鮮な海の幸、山の幸には値札があったり、なかったり。「掌で量る鰯」、朝市の露店ならではの光景が生き生きと伝わってくる。露店のおばあちゃんとのやりとりも、またとない朝市の楽しみなのだ。

季
音
雪



七しめいはい五三参り

山中みどり

ぼつくりの鈴の音かろし七五三
管迫の古りし家紋や七五三
黒々と石の撫で牛七五三
お参りのあとは言問の黍団子
向島花街の黒塀木守柿

生きる力 柚木治子

ラインダンスに生きる力を冬初め
空を飛ぶ絨毯の夢風邪ごこち
干すといふ魔法切干日和かな
曼陀羅図更地にゑがく柿落葉
たれを待つ紫檀の机冬座敷

時 雨 月 由 良 ゆら女

佇 む 石 井 喜 恵

山彦の朱に返りし時雨月
枯野道はるか一筆朱の鳥居
華やかに狐の嫁入り大枯野
近松忌よよと噛みたる紅返し
神農祭朱印頂く列の尾に

穴まどひ頬に手を置くロダン像
日幽か石に張りつく秋の蛇
ひとり佇つ霧の栈橋遠汽笛
霧を梳く木立に鎮む山上湖
秋灯を連ね出て行く終電車

旧与野別所沼界限 網野月を

もがり笛 石山かつ子

秋日和遠師の句碑を繰り返し
風白し確か此処には猴公の
水鳥の影無き柵や秋うらら
沼畔のカフェでワインを秋は赤
秋深しマラソン人を急き立てる

いたづらな風に遊ばれ朴落葉
探勝路ひつそり閑と朴落葉
田仕舞の煙地を這ふ夕間暮
奥山の山姥が吹くもがり笛
その奥に奉る神棚恵比寿講

鳩 大橋 廼代

冬 始め 栢尾 さく子

鈴生りの柿守となる捨案山子
浮みでて氣息ととのふ鳩
くちびるは松本清張冬の鯉
水しぶきあげて水鳥駈けり来る
修羅の海ひたすら渡る冬の蝶

俳論にこぶしの熱き冬始め
まだ飛べる気がして歩く冬の蜂
散るもみぢ三本あれば紅葉邸
数々の想ひ出故郷のみかん山
食べて寝るだけの日々かな冬始め

小 六 月 大村 節代

水 鳥 菊池 ひろこ

方言を恥らふ少女一の酉
偽書多き枕草子石露咲けり
釣書にまた一人増ゆ小六月
ゆつくりとココア泡立つ小六月
張外題ありし書開く温め酒

パソコンと水鳥視野にビジネスホテル
水鳥の動きたる水追ふ日かげ
遊動円木冬夕焼を長引かす
冷まじや城址の坂の幾曲り
タクト振る翁の背筋冷まじや

婆 娑 羅 五 明 昇

秋 果 椎 野 美 代 子

国生みかくや大播鉢のとろろ汁
霧疾しくノ一の影走るがに
蓑虫の揺れも小粋な神楽坂
行く秋や勿来なこそに払ふ歌碑の塵
竹婆娑羅夜寒を揺する風の音

露人ワシコフ叫ぶ柘榴の爛熟す
片恋や檸檬をかじる荒療治
過疎の村富貴となせり富有柿
榎櫃の実ずばら成りしてずばら落つ
裏庭の灯を消さん柚子を挽ぐ

卑 弥 呼 の 国 境 延 昭

いにしへの奈良 島 津 初 花

龍田姫卑弥呼の国はいまも謎
鳩の輪に嘴太鴉 秋日和
ぼつねんと点す駐在肌寒し
剃り立ての小僧の頭榎櫃の実
行く秋や拔身をさらす古刀展

深秋や卑弥呼の眠る森静か
まほろばの周溝閉ざす枯野原
整列す埴輪数多に冬日射す
墳丘を下りて憩ふコスモス畑
晩秋の夕焼けに沈む奈良の街

能面 鈴木康世

能面の目の奥深し秋気澄む
持てあます夜寒の刻を半跏趺坐
独り居の耳さとくゐる夜寒かな
聴きとめし夜寒の街の風の音
能面と遺影に語りゐる夜寒

落葉 田寺玲子

タンカーの遅遅と沖ゆく御講風
新しき古墳の標落葉散る
もみづるや六甲むこの峰峰晴れわたり
石路咲くや波音高き移情閣
鳥渡る朝日に映ゆる木の十字

水鳥 十倉和子

大橋の信号待ちに水鳥来
内濠にあそぶ水鳥チエスのごと
浮寝鳥夕さざなみに乗りそろふ
学僧に囲まれてをり枯蟪蛄
帰宅したる子等に枯野の匂ふなり

冬景色 鳥羽和風

ポット押す開く頁に置く蜜柑
鯛焼の腸も実も骨も餡
大根干す築百年の前後
大根に萎びる日差し桶洗ふ
木洩れ日を選びて冬蝶終の舞

家康の 永野史代

家康の腹は空洞菊人形

路地裏に小菊の鉢を守りて老ゆ
錆び鮎の焼かれつぷりのあはれなり
のひらの小虫を赦す秋の暮
門に佇つ母に手を振る秋の暮

立 冬 波多野 寿子

文机の向かうに揺れて式部の実
穏やかな空を見てをり冬立つ日
いち枚が風とあそぶや柿落葉
友来り両手を握る小春の日
冬薔薇を活けて華やぐひとりの居

双 岳 星野和葉

風邪背負ひ何の因果か一万歩
鴉一羽降り立つ冬田夕日影
双岳のうなづき合ひて眠るかな
煮凝やものぐさの身を託ちをり
口取の端に煮凝り座を占むる

紅 葉 茂木和子

書き順の今昔おもふ文化の日
方位盤の文字のあやふし霧走る
冬紅葉はらりガーネットの指輪
張りぼてのべこが首振る紅葉窓
街路樹に真つ赤な顔の実冬紅葉

浮 寝 鳥 森 本 早 苗

柘榴爆ぜ不吉な予感漂ひぬ
照紅葉外語渦巻く東照宮
ライトアップの逆さ紅葉を揺する波
銃声の無き国の沼浮寝鳥
ゆりのき落葉大股でバスを追ふ

菊 矢 作 水 尾

天守閣背に大賞の菊あかり
大奥の美女競ひあふ菊人形
永字八法小春の海へ筆おろす
菊人形今日の命をかがやかす
分校は今年限りや草紅葉

座談会

最近の名句集を探る

五十嵐秀彦『暗渠の雪』 赤野四羽

杉山久子『葉』 大西朋

小田島渚『羽化の街』 名取里美

司会 筑紫磐井

▼ENJO 日野草城

桑田和子

▼今月の華

中川雅雪

中戸川由実

▼巻頭三句

山尾玉藻

古田紀一

高橋将夫

河村正浩

上田日差し

中山和子

▼俳句と短歌の10作競詠

野名紅里

郡司和斗

▼全国俳誌協会吟行記

秋尾敏

▼好評連載

成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の詩語イメージ辞典

神作研一

てのひらの江戸

—— 古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

穂矢まりえ

諸家書架

二ノ宮一雄

俳句四季

Haiku Shiki

2024年2月号

1月20日発売
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音月

行く秋

松井由紀子

行く秋や「あやとりばし」の朱のうねり
老木に勁き背なある秋の果
不覚にも演歌に涙深む秋
木枯や目玉の乾く検診日
好きなひと好きなステージ消えて冬

影の有無

正木萬蝶

来し方を謎のをとことみて夜寒
同胞と猫をとり合ふ夜寒かな
あまびえの化粧穏やか神無月
一乗寺下り松こそ冷まじや
冷まじや影なきひとと添ひ遂ぐる

人恋ふる

梅澤佐江

数珠玉の温もりを摘む夕明り
冷まじや棲み分けの無き人けもの
冬耕や暮色に染まりゆく翁
祝事ほきごとや和服の裾に小春風
綿虫に思慕の重さや人恋し

光芒

大場順子

底紅や兵死する時「おかあさん」
船笛に応ふる船よ夜寒し
膝の猫おろすに忍びなき夜寒
小春日や地図を広げて旅心地
初冬や光芒美しき日本海

返り花

松宮保人

立冬やカフェの薫る熊川宿
冬蝶の蔵の庇にそれつきり
返り花数少なくて慕はしき
鐘楼へ登る道あり返り花
手の平に掬ふてみたき雪螢

子守歌 町野 広子

秋の暮小さく低く子守歌
老斑の散りたるこの手秋の鮎
二度揚の秋鮎頭から食らふ
蓑虫や中天を行く一機あり
露天湯に音なく霧の寄り着きぬ

瀬戸小春 森川 義子

瀬戸小春小舟の水脈の輝けり
冬晴れの瀬戸の潮路をまぶしめり
遥拝の奥社を包む照紅葉
山寺の急なきざはし朴落葉
計らずも知恵の輪抜けて冬ぬくし

水馴れ棹 丸山 マスミ

朝霧や木曾の筏の水馴れ棹
海神を鎮めし神話霧霽るる
肌寒や手機の音の軋む音
乙張めりはりある台詞廻しや村歌舞伎
宮鳩を追ひて転んで七五三

上州三山 松本 光子

裾野から眠る上毛山三山
榛名湖のむらさき濃ゆき霧の涌く
下仁田を育てて眠る赤城山
鉛筆に誰の菌型か山眠る
煮凝を小皿に取りて啜る吾子

秋 意 渡辺 舍人

麗日や角張つて飲茶ヤムチャし結納す
うそ寒やおのれを抱き思考する
日にち葉冬日一枚重ね貼る
幻影の蛇冬窟に走り征く
草枯の香たつ古庭奈良泊まり

草の骨 池田 雅夫

霜月の川の辺白き草の骨
竹とんぼ唸りをあげて冬空へ
冬の星今にも落ちてくる気配
北風を凌ぐ曲り家十一戸
寒禽の一声森を貫けり

掛大根 井上燈女

冬鳥のどこへ降りやう足らぬ杭
大根引く泥手で被る頬かぶり
長短を揃へ夫婦の掛大根
荒鋤やざくりと入れて葱を掘る
さざん花や蔵白々と威を保つ

行く秋 内田恵子

薬学部目差す少年榎植の実
割烹着の袖の膨らみピーマン切る
吊し柿土蔵の鍵の錆はじむ
ゆるやかな古墳の起伏秋の果
行く秋や人懐こくなる老婦人

仏頂面 高島寛治

行く秋や築百年の梁太し
榎植の実仏頂面を売り物に
別れ路の初冬の日差し地に零れ
城見上げ濠を見渡す冬初め
ぢぢばばが取り仕切りをり七五三

松茸狩 山田美佐尾

限りある命と思ふ朴落葉
人生の確かな心地松茸狩
松茸さがし古き祠のあたりまで
御来光拝む霊峰神の旅
小春日や「花一匁」を口遊む

一本道 福田千春

冷まじや瓦礫に埋れぬひぐるみ
冷まじや銀穂貫く一本道
意を決し火中の栗を濁り酒
短日や糸の通らぬ針の穴
影絵となる夕暮の街日短

心張り棒 大塚茂子

立冬や農婦伸びする西明り
二歳馬の腓美し今朝の冬
公園の熱き記憶の落葉ふる
空き箱が母の針箱白障子
そぞろ寒里の裏口心張り棒

永田町 近藤 徹平

永田町寒鴉うろつく一丁目
冬隣禰宜が奥宮囲ひをり
大宇宙の奥の奥より流れ星
朴落葉迷ひ込んだる獣道
米不作パエリア料理講座ピラ

冬夕焼 井上 玲子

秩父嶺を真つ赤に染むる冬夕焼
冬夕焼追ひかけてゆく鳥の群
冬耕の畝ながながと夕映ゆる
白雲の浮かぶ池塘に小春風
小春日や杖一本で嵯峨野路

女子アナ 熊倉 千重子

貌うづめまあるき形に浮寝鳥
茅葺きの残る山里寒夕焼
風邪気味の女子アナむしろ艶めきて
風邪心地電子レンジに頼る日々
切干や里の日向の匂ひして

小春日和 荒井 俱子

草の実や借り手を募る貸農園
夕日祭草の実ひかる休耕田
小春日や銜へタバコで農談義
池小春亀が挙りて甲羅干す
初霜や温め返すタンシチュー

冬 桜 野口 和子

ウインカー山へ山へと冬桜
柿甘し前川早生次郎てふ名なり
石路の花独りの姉の暮らしぶり
絵心をくすぐる形ラフランス
新店のカフェに数本吊し柿

残照 上戸 千津子

散り紅葉残照に影重ねけり
残照に染まる水鳥影を増し
散り紅葉処選べず水の上
楽に揺れ外人墓地の冬芒
六甲道色とりどりの落葉かな

紅葉晴 松山清子

コーヒーのほどよき苦味冬立つ日
紅葉晴「この水飲めぬ」ポンプ井戸
今日こそは一駅歩く紅葉晴
今朝の雨清めと覚ゆ神迎
秋深む寺に北斎天井画

秋ざくら 西浦千枝子

白壁の一棟目立つ柿の里
どんぐりや野遊びの児のポケより
紅葉道カーブミラーは児の丈に
母校への一本道や秋ざくら
走行車ふはりと撫ぶる薄の穂

蜜柑もぐ 川崎道子

文左衛門ここより船出蜜柑もぐ
文化の日用語辞典はほろぼろに
鶉の贅品数ふやす保存食
水鳥の離る一羽は天邪鬼
小春日や産土の杜太鼓鳴る

毎月25日発売
定価1000円(税込)

月刊俳句界 2024年2月号

特集

俳句評論ノススメ

- 巻頭「俳句評論ノススメ」岸本尚毅
- 俳句評論へのステップ 青木亮人
- 私の評論執筆法
- 名俳句評論ベスト3
今泉康弘 岡田一実 池田瑠那
- 坂本宮尾 筑紫磐井 依田善朗

タラシア 俳句界NOW 西山睦

特別作品21句

佐藤文香「翻車魚」

特集 猫と俳句

- 俳人はなぜ「猫」を詠むのか 堀本裕樹
- 猫俳句コレクション30 西村麒麟
- 私と猫
權未知子 倉阪鬼一郎 土肥あき子
堀田季何 仲寒蟬 家登みろく

発表！ 第14回北斗賞 選評・受賞の言葉ほか

※セレクション結社 「渋柿」安原谿游

私の一冊 山下幸典「河内野」

佐高信の甘口で「コンチハ」!

対談

久堀文(井護士)

「俳句界」投稿欄 「一流選者13名! 日本一充実の投句欄」



株式会社 文學の森

お求めは... 〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

季音花

冬に入る

原田秀子

当世風焼芋売りの名調子
爛徳利取り出す夫や冬に入る
一枝の影を映して冬障子
カウベルをつけてもみたき熊の首
檻の熊かなしく見遣るテディーベア

一次関数

染谷風子

米喰はぬ人に弓引く案山子かな
往きたきは月の都よ兎抱く
水鳥の陣に大将二等兵
厄介な文語助動詞漱石忌
人生は一次関数社会鍋

百円バス

横山君夫

初冬の百円バスに旅心地
いまいちど兎抱きしめ転校す
旬ものと女将さし出す地の海鼠
園丁に今日はなりきり冬構
新米を炊いて誕生日のカレー

能登時雨

渋谷きいち

いか釣船の揺るる港に能登時雨
一日一本能登は時雨れて路線バス
何処までも月の付きくる神の旅
雲上の限界集落大根干す
枯葎亡母の思ひ限り無し

冬帽子

中野

疆

落葉掃く人とあいさつ交はしけり
おでん囲み優しき時となりにけり
羽根させば若返る日の冬帽子
冬の夜のうす紫の抱き枕
立冬よ番号札を持つ時間

秋惜しむ 河野 はるみ

覚えなき額の傷や朝寒し
小春日や枝から枝へちちちちと
カフエテラス栗鼠の御出座し小春かな
村中の男が化粧ふ秋祭
冬耕や酒を忍ばせ背に背負子

霜 月 石田 慶子

冷まじや平和ほけなる輩達
冷まじや詰め放題の人の列
文化の日万年筆の試し書き
天麩羅の衣重たき松茸食ぶ
短日のポストにささる回覧板

神無月 後藤 綾子

神無月音一つなき神の森
馥郁と神域芳し菊花展
ほのともゆ落葉の湿りあたたかし
神無月駅を通過の特急車
虎落笛疑問符いつも持続け

御師の家 保坂 翔太

天空の城を描かむ霧の海
御朱印の最終頁秋遍路
虚心なる童のひとみ新松子
「新米」と農家の幟野辺の道
山風に揺るる干柿御師の家

無蓋貨車 曲淵 徹雄

野火止の細き水音夕紅葉
俵つむ馬車の面影今年米
粧ふ山よ夕日になじむ艶姿
やや寒や鉄橋渡る無蓋貨車
蹲の音聴きゐるや秋深む

隙間風 青木 鶴城

待ち人の顔の見えたり雲降る
おやすみに返る声なし隙間風
蠟梅や吾が生き方に悔いのなし
境内の砂利の響きや落葉踏む
冬雲雀何を矜恃の街宣車

秋 思 日 高 道 を

山寺にやうやう寒き時来る
弘暁のお百度参り露寒し
こぼれ萩夕日の中を掃かれけり
秋惜しむ地の塩となる余生かな
夙や都会の中の路地の底

馳走の日 檜鼻ことは

独り居の戸口たたくや芋煮会
秋茄子のけふは伏見の女酒
檸檬買ふ三条上る恵比須町
美しき箸の使ひ手初秋刀魚
嬉しきは浅漬のある朝御飯

粕 汁 野 田 静 香

木の葉散り風とコラボや円舞曲
A I の無限の未来鎌鼬
鍋を挟み内輪話や隙間風
絆のごときトライアングル星座
粕汁や母の齢と重ねをり

小 六 月 笹 本 啓 子

人を待つ淋しがりやの牛膝
山茶花や垣根越しなる日の匂ひ
釘の無き大工の口や小六月
空き缶の転がる音や神渡し
映画館出で北風と体当り

水 鳥 高 橋 満 耶 子

水鳥のひそひそ話盗み聞く
まり模様の揃ひの法被菰卷す
冬の月橋 杭岩を幽玄に
左足庇へば右に空つ風
神の留守どんどん増ゆる乱れ箱

暮 早 し 鈴 木 玲 子

面会の母の目笑ふ秋うらら
化粧塩厚く落鮎焼かれたり
和服女性の持つ弓袋冬はじめ
鯛焼を割る武骨なるをとこの手
地下鉄を出でて地上の暮早し

帰り咲 宮崎チアキ

歌ひ始めの緊張余所に秋うらら
西方は紫苑の色に秋の暮
「もうだめ」と思へど押せば帰り咲
道問へば送り来る母子冬ぬくし
墨染の家並の彼方冬夕焼

毛糸編む 石川理恵

足の指癒つてしまひし夜寒かな
二親に四人の祖父母七五三
毛糸編むをんな内科の待合室
毛糸編む眼鏡かけたり外したり
文豪の集ひし街に木枯吹く

異常気象 田中章嘉

異常気象今日は立冬仄かなり
菰を巻く日光街道松並木
強風や枯葉散らかす横丁に
北風止んで朝飯前の竹箒
返り花ボンボンダリア蓄つけ

温め酒 松島寛久

少欲に至らぬ秋夜京に居り
雪螢この世へここへ何をしに
熊にも教へる事あり休校かな
老いたれば狂へ旅立て帰り花
光陰に置きざれにされ温め酒

木 枯 瀬戸雄二郎

木枯を行く軍歌など口ずさみ
ジャンパー着れば我も無頼派古書の街
凧に向ひ坂漕ぐ少年よ
木枯が姥捨山を下りて来し
木枯や此の頃見ない靴磨き

長き夜 下川光子

長き夜の夢のあひまを犬吠ゆる
禅僧の大きな手足榎檀の実
行く秋や峰の鋭き武甲山
早々に銀杏落葉の今年かな
ジャム舐めて喉よろこぶ神の留守

和楽の響き 野村美子

境内の和楽の響き 神渡
永久に語りつなぐや一茶の忌
奥入瀬の溪流沿ひの夕紅葉
山茶花の垣根華やか光帯び
香り良き垣の山茶花散りやまず

山茶花 野平美紗子

独り居の続く毎日白山茶花
夢にまで山茶花の道夫と行く
牛膝独り歩めばすがりくる
夕焼の雲を飛び越え神渡し
今にして反省しきり秋夕焼

菊日和 葛城千世子

菊清しオープニングのクラッカー
きはだてる墨絵の瀑布秋の蘭
白菊や開場間際に活け終はる
能楽をスマホで撮し白い菊
籠選び華道体験一重菊

特集 第38回俳壇賞決定発表

巻頭作品10句

大高霧海・松岡隆子・西池冬扇
渡辺誠一郎・稲畑廣太郎・上田日差子
恩田侑布子・高柳克弘

俳壇

2月号

1月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
小林貴子

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第IV期」：鈴木しげを・名村早智子

連載

知ってるようで知らない俳句用語……井上泰至
俳人の住む町……原 朝子・野中亮介
名句のしくみと条件……坂口昌弘
私の本棚・私の一冊……武藤紀子
十二か月添削教室……前北かおる
俳書の森を歩む……栗林 浩

俳句と随想12か月

石井いさお・宮谷昌代

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

『水明誌』

を繙く

(水明十一月号)

関根誠子

(「炎環」同人)

秋嶺の秘仏に啼くや石の鶏 鳥羽和風

「三方(みかた)石観世音」七句中の一句。その昔、若狭遍歴にあった弘法大師が一夜のうちに観音像を彫ろうとしたが夜明けとなって妙法石から鶏の声がしたため、片手を彫れないまま立ち去ったそう。やがて観音像は手足の不自由な人達の信仰を集めるようになった。

完成させないまま立ち去った弘法大師の思いは不明だが、この観音像がかえって信心を集めたという事に日本らしい信仰の在り方を感じる。外国には圧倒的な神の力で衆生を導く説話が多いが、日本の物語に出て来る神仏は貧しい身形で困っている人として現れ、助けた人以後でご褒美を授ける的なパターンが多い。片手のない観音様は不自由で苦しむ人達から逆に同情され大切にされた。その心根にやがては有形無形の褒美がもたらされたのである。

秋天に輝く嶺を頂いた里に生まれた秘仏の伝説、顛末をずっと見守っているのは四季折々の美しさを見せる山々とそれを包み込む空。今も木で彫った手をお供えに来る人があつとを断たないと言う。

瓶底に円錐の見ゆ天の川 網野月を

「天の川界限」五句の一句。底が平らでない瓶はガラス瓶以外にもありそうだが、円錐を意識させる形状また句の内容から推察すると多分ワインボトルと違って良いのだろう。瓶底の山とか溝はワインの熟成過程で出来る澱をここに沈め、グラスに入れて行くのを防ぐ為だそう。そういう事情は事情として、飲む側にはそこに美味しいワインがあり、我がころを滑らかにしてくるだけで何の不都合もない。芳醇なワインが瓶から身内に移っていくに連れ、今宵は何とさまざまな思いが広がっていく事か。澱の中にひとり空を指してすつくと立つ円錐の姿に作者は何を見ていたのだろう。

もう会えなくなってしまうた人々が天の川に居る様に思える不思議。忘れたかと思っていた悔いや怒り・哀しみが星の界の何処かに、しかもあの時の感覚そのままワインの澱の様に溜まっていた事に、作者自身もまた驚きを感じた事だろう。

見事な天の川を見る事は今はなかなか出来なくなつたが、季語となつた天の川は古今の俳句と共に永遠の天の川となつて、全ての人のこのころを受けとめる様に静かに広がっている。

講演「音なの、俳句」要旨

(水明塾 2023. 10. 30 講演より)

堀 田 季 何

(「楽園」主宰・一般社団法人現代俳句協会理事)

水明塾では、俳句の韻律について話した。盛り込みすぎで大幅に予定時間を上回ってしまったが、ここに要点を書いておきたい。細かい点(前半に多く引用した外国の詩など)や聴衆との掛け合いは割愛させていただく。

まず、駄洒落のようだが、講演題は「音なの、俳句」にした。「音なの」と「大人の」と同音異義の掛詞になっていて、内容に合わせたかったからである。ちなみに、音と意を合わせる手法については、講演の後半で取り上げた。

次に、どれくらいの割合の人が、音を考えて作るのか、水明塾の聴衆に訊いてみた。北海道での講演や仲間の俳人たちにも訊いてみた質問だが、どこでも五割を切った。三、四割もあれば良い方だ。現代の俳人や俳句愛好家にとって、韻律は、考慮されない、ないし、句意より劣後するのだ。

講演の内容は、端的に言えば、俳句において音は大事だ、音を考えて作るべきだ、というメッセージに尽きる。講演の前半は、二つの視点から、音が大事であることを主張した。一つは、俳句が(広義の)詩であり、詩と音は不可分の関係にあるという視点、もう一つは、俳句の技術は、音を無視して完成しないという視点である。

そもそも詩には広義と狭義がある。広義は、あらゆる意味での poetry であり、俳句は含まれる。狭義は、外国の形式によるものに限定され、旧詩・旧体詩は漢詩(ここでは、中国の形式による旧詩全般という意味。中国では、漢代の詩を意味してしまう)を指し、新詩や新体詩は西洋形式な詩を指

す。江戸時代までは、ただ「詩」といえば、漢詩を指したし、今では、ただ「詩」といえば、西洋形式の詩を指す。なお、江戸時代まで、国内の形式による（広義）の詩は、歌であった。長歌、短歌、連歌（俳諧連歌含む）は、いずれも歌であり、近代になって俳諧連歌の発句（地発句）が完全に独立した際、歌をぶった切った句そのものが一つの詩型になった。ただし、短さゆえ、「調ぶること」という歌としての性質が具現しづらくなったため、近代以降の俳句において韻律はさほど考慮されなくなりました。ちなみに、俳句という言葉は、近世には存在しており、俳諧連歌の句を意味した。古典俳句といっても良い。

重要なのは、俳句が広義の詩に含まれることである。歌（言葉通り、音の要素が強い）よりの発生過程からも、詩の性質からも自明である。定義というより、性質という言い方をしたのは、詩の定義は人によって違うからだ。例えば、「詩は音楽にならなかつた言葉であり、音楽は言葉にならなかつた詩である」（ヘルマン・ヘッセ）、「詩は凝縮した感情表現、より簡単にいえば、高められたことばにすぎない」（新倉俊一）、「散文は歩行、詩は舞踏」（ポール・ヴァレリイ）、「詩は認識を詠むもの」（高柳重信）といった定義が存在する。これらの定義からでも、詩における、韻律の要素と認識強調の要素が見て取れる。

講演においては、大いに脱線し、中国及び西洋（欧米）における詩の歴史に触れ、世界どこでも、どの言語でも、詩と

いうものが韻律と不可分の関係にあることを、豊富な実例とともに主張した。

中国の詩については、軽重はあるが、詩経、楚辞、樂府、四言、五言、七言詩、絶句・律詩、宋詞といった詩型を網羅した。各詞型における音数（中国語では字数と同義）、定型、押韻への強烈にこだわり、そして、歌との関係性について話した。

中国最古の詩篇は『詩経』で、西周初期の前一一世紀から東周初期の前七世紀の詩を春秋時代の前六世紀頃に蒐め、編んだものとされる。これらの詩は、各地方の歌謡などが口承で伝播され、後に書きとめられて成書化されたものである。2+2の四字句が基本で、何句かで章をなす。短いものは2章12句、長いものは16章120句といった具合に、長短の幅はある。押韻も見られるが、位置は自由である。表現ないし修辞の特徴としては、「賦」（直叙的）、「比」（直喩的）、「興」（隱喩的）、が挙げられるが、「興」と俳句の関係については、恩田祐布子評論集『渾沌の恋人 北斎の波、芭蕉の興』に詳しい。『詩経』に収められている詩の例としては、「桃夭」を挙げた。つい少し前の日本でも通用する婚姻の内容、2+2の四字句、一部の音の繰り返しなどを指摘した。

二番目に古い詩の書物は『楚辞』で、中国戦国時代の楚地方に謡われた辞と呼ばれる形式の韻文を蒐め、編んだものである。一句が6字（六言）ないし7字（七言）で、面白いのは、「兮」という、それ自体では意味を持たない字が句の終

わりに多用されることである。詩の調子、詠嘆といった効果があるようで、俳句の切字に通じる。『楚辞』収録作歌で最も有名な屈原の詩「離騷」の一部を挙げた。現代と変わらぬ、汚い世の中への憂いと嘆き、七言の句、「兮」の使用などを指摘した。

その後、「三國志」で有名な曹操が書いた「短歌行」の冒頭、そして、日本でも人気のある陶淵明が書いた「挽歌詩 其一」の冒頭を紹介した。どちらも人生の儂さを詠んでいて、非常に切ない。また、曹操の詩は、古今中国の詩に多い酒飲みの詩でもある。ちなみに、曹操「短歌行」は四言詩、陶淵明「挽歌詩」は五言詩で、韻律は整えられている。

それから、五言詩及び七言詩が主流になっていくが、六朝時代の民歌（西曲歌など）も詩に大きな影響を与えた。隋唐では、五言及び七言で、絶句という四句形式、律詩という八句形式が多く詠まれる。韻律の式目や音に伴う技法もこの頃に頂点を極め、唐は、中国詩における型の最盛期にあたる。

唐詩の例として、孟浩然の「春暁」、詩聖・杜甫の「春望」、詩仏・王維の「鹿柴」、三首を挙げた。有名な詩なので、多くの解説は要らないが、「春暁」を中心に、平仄、押韻をはじめ、様々な音の式目及び技法について話した。いずれも、非常に韻律の優れている作品であり、日本人が楽しむとすれば、（意味を訳す場合でなければ）書き下し文でなく、上下に漢字を音読みするのが最適だと思っている（平仄は別として、唐代の音に近い）。いくつかの唐詩を、唐代の音及び現

代中国語（普通話）の音で、中国人が朗読している動画はインターネットで見つかるので、是非とも聴いていただきたい。なお、三首を選んだ理由は、世界認識が私たち日本の俳人に通じやすいからである。「春暁」という詩の冒頭に出てくる「春眠不覚暁」の「春眠」という言葉はそのまま季語になった。「春望」の冒頭は、これまた有名な「国破山河在」であり、一首には春の情感がある。「鹿柴」は、日本で季語になった「青苔」が出てくるし、後世の侘寂の概念と通じる趣がある。

それから、形式が崩れ、複雑化し、宋词や元曲が出てきたことを述べた。詞や曲という言葉から判る通り、音楽に合わせることで、様々な詞調が設定され、826調、同調異体を数える、2306体あると言われる。興味深いことに、詞調ごとに決まった題名（詞牌）が付くことになっていて、同じ詞調のものは、内容を反映した副題で分けられた。しかも、唐詩などと違って、句ごとに字数が異なり、一句の字数は1字から11字までと、非常に幅が広い。ただし、平仄と脚韻を持っている。一例を挙げると、「憶江南」という詞牌の詩（宋词）だと、一句の字数が3・5・7・7・5という順番で並ぶことになり、押韻は2・4・5句目に来るといふ具合である。

この時代に有名な蘇軾（蘇東坡とも言う。彼が「東坡肉」を考案）の二首を取り上げた。ただし、蘇軾の宋词（水調歌頭）などがある）でなく、彼の作品ではもっと有名な他

形式の二首にした。一首目は、「春宵（春夜）」で、唐代にもあった七言絶句という形式。冒頭の「春宵一刻值千金」が有名だが、日本で季語になった「鞦韆」も出てくるし、脚韻もあって、模範的。もう一首は、「前赤壁賦」の冒頭である。賦というのも詩型の一つである。

中国では、そのまま多様化しながら、清代に至り、西洋詩が入ってきて様変わりする。そして、中国の詩と比べてみるため、西洋（欧米）の詩を取り上げたが、音とのつながり、最も極まった定型の登場（中国の唐詩に対して、ソネット）、そこからの多様化は、中国の詩と似た変遷である（日本の歌・句の流れも、大きく違わない）。

古代ギリシア・ローマの時代から、西洋での詩は、音楽と密接で、しかも文芸の中では特別な扱いを受けていた。ポエトリー、ポエムなどの語源は「ポイエーシス」であるが、直訳すれば、「行う・つくる」ことであり、呪ったり祈ったりすることを意味したとされる。世界中の、古代における呪術及び祈禱と違わず、当然、朗誦されていた。また、ギリシア・ローマ神話で、文芸は、「ムーシケー」（朗誦されるものとしての詩芸術及び舞踊を含む音楽。音楽＝ミュージックの語源）に含まれたが、そのムーシケーを司る九柱の女神ムーサ（ミューズ）たちのうち六柱までも、詩を司っている。叙事詩、抒情詩、牧歌（喜劇とセツト）、挽歌（悲劇とセツト）、独唱歌、讃歌である。詩の重要性と音との関係性は明白であり、後に吟遊詩人が現れたり、多くの作曲家たちが優

れた詩を歌詞にして歌曲を書いたり、今でも、詩人たちが仕事として詩を朗唱したりするのは、長い伝統に由来する。

ちなみに、古代ギリシア・ローマ時代には、優れた詩人には、古代オリンピックの優勝者と同じく、月桂冠が贈られた（詩は競技でもあった）。そこから桂冠詩人という言葉が生まれたが、その伝統も、中世、近世、近代、現代と細々と続いていて、ペトラルカやスペンサー、ワーズワースなどが榮譽に輝いた。英国王家は、今も桂冠詩人を任命している。

中世以降も詩は別格で、欧州の大学制度において、前世紀までは、詩は、人が身につけなければならない学芸の基本とされ、自由七科（リベラル・アーツ）の一種である音楽に含まれていた。現代も、欧米の王室、閣僚、エリート層には、詩作や詩の朗読をする人間が多い。無論、中近東でも中国でも同様である。日本では、エリートの教養としての詩は、だいぶ廃れてしまつて、皇室が歌を詠むくらいになつてしまつた。

欧米の定型詩で大切なのは、行の数、一行あたりの音節の数、一行あたりの音脚・音歩（強弱音や長短音の組合せによる韻律の単位）の数、一行における音脚・音歩の並び方、それに、様々な押韻のパターンである。格好の例として、イタリア風（ペトラルカ風）ソネットとイギリス風（シエクスタピア風）ソネットを軽く紹介した。語源は、ラテン語の *sonus*（音）であつて、ソネットは、当時のイタリア語で小さい歌を意味した。英語のソングも、同じ語源に由来する。

講演では、成立の歴史や言語によって一行の構成が異なることにも触れたが、イタリヤ風とイギリス風の違いやそれぞれの韻律の式目、そして、使用されている様々な修辭を、ペトルカ「平和を見出さず」とシエイクスピア「ソネット第18番」を例に解説した。そして、定型が崩れ、自由詩になった後も、韻律へのこだわりが現代にも残っている例として、アマンダ・ゴーマンが米国のバイデン大統領就任式で披露した自作の詩「The Hill We Climb」の一部を取り上げた。押韻の技術が非常に優れていて、数か所を指摘した。朗読動画も詩の全文もネットで見つかる。

ようやく、俳句の話の戻り、記紀の時代に始まる、歌の歴史、長歌、短歌、連歌、俳諧連歌（連句）、近代俳句という流れについて、詳細に述べた。前述したが、「歌は」調ぶるものなり」（香川景樹）で、長歌、短歌は、普通に歌であり、連歌や俳諧連歌も、（執筆しゅひつという役によって朗誦される）一卷単位でも付句単位でも歌である。単独の句として、歌から独立してしまっている近代以降の俳句は、短歌や連歌ほど調ぶることはできない。しかも、朗誦することは、ほぼ消えてしまい、ひたすら黙って書かれ、黙って読まれる文芸に変わってしまった。しかし、黙読しても、音は脳内で響く。また、歌の一部であった以上は、音の要素を一部受け継ぐのではないだろうか、また、詩である以上は、音の要素は必須ではないだろうか、といった思いを述べた。

ここで、前述した二つ目の視点に移り、俳句の技術は、音

を無視して完成しないことを主張した。俳句には様々な要素があつて、句意（表の意味、裏の意味、想像させる部分）、情報量、焦点、余白、定型か否か、文体の型、言葉の選択や措辭、季題・季語・キーワード、修辭、表記、発音などがある。特定の要素を磨くのは、技巧の話であつて、真の技術は、一句一句、一つ一つの要素の性質、及び、要素のバランスを適切に判断することにある（一部について無自覚であつたとしても）。音に関する要素は、主に、定型、修辭（オノマトペ・押韻・リフレインなど）、発音の三つもあり、音を無視して俳句の技術を極めることはできない。

講演の後半は、これら三つの要素について話した。まず、定型であるが、五七五だけなのか。「俳句の本質からいうと、いちばんたいせつなのは、十七字という定型である」（石田波郷）からすれば、定型は17音（この場合の「字」は漢詩と同じく音のこと）のことであるが、六六五、八二七、四四四五などを定型とは言わないだろう。

凡そ天下に去來程の小さき墓に参りけり 高濱虚子

「Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band」LP ジャケット

ト紙魚舐むる 小澤 實

童貞聖マリア無原罪の御孕りの祝日日和とはなれり

夏井いつき

などは、17音を大幅に超過しているが、上五の長大な字余りだと看做せば、定型を感じられる。

波郷同様に、定型の鬼であつた飯島晴子は、「助け舟の役

割を果たしたのは、恐らく俳句の「定型」であると思う。俳句という「かたち」を浮き輪にして、私はおそるおそる言葉のなかに入っていった」と語っているが、

孔子一行衣服で赫い梨を拭き

恋ともちがふ紅葉の岸をともしして

わが末子立つ冬麗のギリシヤの市場

月光の象番にならぬかといふ

今度こそ筒鳥を聞きとめし貌

といった句を含め、五七五以外にも七七五、七五七、五五七、七五五等の句が多く、句跨りと違って、五と七の三句構造を定型だと信じているようである。晴子に限らず、七七五や七五五は、昔から俳人たちに多用されている型という意味では、一種の定型であろう。

夏石番矢は、そのように定型を考えていて、それらの型以外はすべて自由律だと考えている。しかし、定型かどうかは別として、三句構造を俳句の理想形としているし、奇数の下五（5音に限らない）を愛している。

すべてをなめる波の巨大な舌に愛なし

は七七七で、彼にとつては自由律の句である。しかし、金子兜太になると、三句構造の俳句は、三三三から九九九まで、幅広く定型を感じる、と書いている。その定型感から言えば、番矢の右句は定型句である。つまり、定型がなにかは、俳人によって大きく異なり、答えはないが、定型派を名乗るのであれば、どんな俳人も自分なりの定型感は必要であろう。

定型の話の余談として、俳句における、四拍子説（8ビート説もほぼ同様）と秋尾敏の音歩説を紹介した。定型の中におけるリズム感の問題である。字数の都合上、詳細は割愛するが、三四三の拍をベースに、五七五などに基づく俳句の音歩をのせる、ポリリズムという説である。

思えば、音は、耳で聞くのではなく、脳で聴くものだ。音波は耳で処理されないし、脳に届かず、神経の電子信号として脳が処理し、音を響かせるにすぎない。同じ音波でも状況によって音が変化するし、音波がなくても、音を響かせることは可能である（黙読でも睡眠中の夢でも、音が聴こえることがあるはず）。そして、音は、脳の機能により、心理やイメージに影響する。定型、拍子、リズム感も心理やイメージに影響するし、次に話した、音の修辞である、オノマトベ、押韻、リフレインなども影響する。俳句の要素である以上、句意や季語でなく、音が句の眼目になることも可能であり、そういう句も見かける。ただし、オノマトベにせよ、押韻にせよ、使いさえすれば良いわけではなく、下手に使えば駄句になる。

オノマトベ（擬声語・擬音語・擬態語）の使い方を、説明した。

黒猫の子のぞろぞろと月夜かな

大鯉のぎいと廻りぬ秋の昼

ひらひらと月光降りぬ貝割菜

鳥わたるこきこきこきと缶切れば

飯田龍太

岡井省二

川端茅舎

秋元不死男

ぼちよぼちよといふ水の音あたたかし 今井杏太郎

既存のオノマトベは省略を利かすか（二句目）、意外な対象に使うか（二、三句目）が良く、あとは、オノマトベ自体を工夫する（四、五句目）と成功しやすい。

次に押韻の話をしたが、「五七五の句切れ目を、同じ母音、または子音でつなぐ手法」（秋尾敏）である「普通」を紹介した。

古池や蛙飛びこむ水のおと 芭蕉

では、や (ya) / か (ka) と、む (mu) / み (mi) の二カ所で音通が使われている。ただし、現代では、あまり知られていない技法であるため、殆どの押韻は、句切れ目における頭韻や脚韻、句切れ目と関係ない母音韻や子音韻である。押韻の頻度は、作家によって偏りがあるし、無意識ないし感覚で押韻している作家もいる（左二名の師弟は意識的）。

子燕のこぼれむばかりこぼれざる 小澤 實

韓国の靴ながれつく夏のくれ 同

撃たれ吊され剥かれ割かれ免われ 堀田季何

うすらひのうら魚形の紅うごく 同

最後に、意（内容）と音を合わせる技法について話した。

作曲技術に、ワードペインティング（トーンペインティング）というものがあって、歌詞に音型や旋律を合わせることだが、俳句でも似た技法が存在する。句意に合わせて、押韻する音の選択や音の変化、音の余剰（字余り）、音の感触に基づく助詞などの選択、韻律の緩急を駆使することである。

この技法に名前はないが、こちらについても、無意識ないし感覚で行っている作家も少なくない。

蛇穴を出て靴の音風の音 稲畑汀子

滝音にふれて来し風木々騒ぐ 同

一句目、靴、風のK音（しかも頭韻+対句）で世界の現実を音で気づく様子を表す。二句目は、K音で注意喚起し、G音に転じて、滝から木々の音への変化を演出。

ぐわんじつの防弾ガラスよくはじく 堀田季何

斑蝶斑蝶斑蝶斑 同

右二句も同様。句意と音が合体している。

レンタルビデオ屋水柱籠めなりつぶるるな 小澤 實

は、「籠め」の感じを、「籠め」までの字余り、さらに、助詞・動詞なしの詰まった感じで表現している。その上、中七からのツ音頭韻とナ音押韻で下五を引き出しているし、4音の濁音も効いている。

スコップ裏で叩き固めや雪達磨 堀田季何

濁音といえ、この句も、内容的に濁音と合わせている。格調高い「に」でなく、「で」という濁音の助詞を使用して、D音で下五と押韻しているのもポイントである。さらに、「叩き固める」でも「叩いて固め」でもなく「叩き固めや」としたことで、固まった感じを強調している。

オンザロックス鱧も腹子もつ頃ぞ 小澤 實

人妻ぞいそぎんちやくに指入れて 同

これら二句に、「や」「よ」でなく、「ぞ」を使っているのは、

やはり、ニュアンスの違いだけでなく、音の必然性もある。
をさなくて昼寝の國の人となる 田中裕明

のように、音感や表記で、読まれる速度、脳内で音が再生される速度ないし緩急、時間をコントロールする句もある。名詞、助詞、動詞の数や位置で操作することもあるが、大体、音読すると判る。

ラストに、意と音を合わせる技法を、複合的に使った参考句を挙げる。どの辺に使われているか判るだろうか。

手を入れて水の厚しよ冬泉

小川 軽舟

中華屋の炒め叫ぶや青嵐

小澤 實

瑠璃深きブルーベリーをどんぶり食ひ

小澤 實

深海六千五百メートル潜りし男と鱒を食ふ

田中 裕明

みづうみのみなどのなつのみじかけれ

田中 裕明

一風変わった内容になったが、俳句における韻律を考える一助になれば幸いである。「水明」主宰、役員、会員の皆さまに御礼申し上げます。

俳句

2月号
予告

1月25日発売

予価 1,300円(本体1,182円)⑩

特別作品 高橋睦郎・行方克巳・津川絵理子

大特集

省略

ものごとの核心を掴む

▼総論 省略とは何か―省略と余韻の違い―江崎紀和子
▼解説 何を省略するか 主語／動詞／時間・場所意味ほか
▼各論 どう省略するか 作句の現場から
▼鑑賞 省略の効いた名句50選

特集

日本橋と俳句

▼総論 日本橋と俳句 俳諧について
▼論考 日本橋と俳句の歴史／江戸の俳諧師と日本橋
▼略年譜 近代の俳人と日本橋
▼日本橋句会の歴史と現在

特別企画 全国結社マップ vol.5 近畿

季寄せを兼ねた 俳句手帖 春

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

現代俳句鑑賞

網野月を

太くて長い記憶喪失の糸瓜なり

遠山陽子

〔俳句四季〕 11月号・巻頭句より

三句を揃えての巻頭句であり他の二句が「夕しぐれ」「冬支度」で詠まれているので、掲句も冬の季感で解釈した。ということとは「記憶喪失の糸瓜」は枯れている糸瓜と言うことになるように思う。将に掲句の肝は「記憶喪失の糸瓜」という表現なのである。ここだけを取り上げて、意味を取ろうとすれば糸瓜を記憶喪失の主体として解してしまいうさだが、糸瓜はあくまでも記憶喪失の対象なのである。つまり、糸瓜を植えて育てた者にとつての記憶の外にある糸瓜なのである。他に「夕しぐれ枝から縄が垂れてゐる」がある。

師にあはん友にもあはん大花野

高岡周子

〔俳句四季〕 11月号・湖ひかるより

句末の「……ん」を推量の助動詞として解した。話者自身の意志や希望を表している、と言うことである。俳句の師匠に会うつもりだ、句友にも会うつもりだ、と言うことなのである。座五の季語「大花野」の美しい景とともに一種の異

界を連想させる、怪しさを秘める光景に思わずここにはいるはずもない師匠と句友に会えるような心持になったのではあるまいか。もしかしらかつて師匠と句友と共にこの「大花野」に吟行したのかも知れない。他に「もの思ふ歩幅に岐れ花野みち」がある。

喜雨浴ぶる植ゑたる花も野の花も

田子慕古

〔俳句四季〕 11月号・日々を紡ぎてより

上五の季語「喜雨」はそもそも人にとつて、特に農家にとつての感慨を込めた季語であろう。生命を救う雨であり、その喜びは他に勝るものがない。一方、掲句の「喜」は花にとつての「喜」なのである。

鬼灯や椅子に正座をして読書

小林貴子

〔俳句〕 11月号・甘露より

訳もなくこういふ姿勢をすることがある。正座してみると案外足が気持ちよかつたりするものだ。句の中の情報はそれだけで、椅子の背景や周囲のシチュエーションは全く分からない。盆飾りにするほどの「鬼灯」であるから、敬虔な場面

設定の上での句意かも知れないが、筆者には日常を活写しているように読めるのである。他に「竹伐る日竹の降らす甘露かな」がある。

耳鳴りは近くに鳴りて入梅星 林 桂

〔俳句〕11月号・秋まで紀行・二〇二三より

「近くに鳴りて」というよりは、耳そのものか、頭の中で鳴っている、と言う感覚が的確だろう。雲間に見えたり隠れたりする「入梅星」と同様に、「耳鳴り」は鳴ったり止んだりするものである。他に「川からの風の吹く日や枇杷の花」がある。

秋風や驢馬一頭の墓の銘 高橋修宏

〔俳句〕11月号・エピタフより

何とも格好いい句である。そして同じくらい驢馬と飼い主の紐帯の確かさに感じ入る。「秋風」の爽涼感はこれ以上ない設定であろう。筆者は「スーホの白い馬」を思い出した。この馬は驢馬ではないのだが、読者は少年スーホと白い馬の濃やかな情愛に感動する。他に「桃畠また一つ小火やがて千」「桃に桃ふれ傷みつつ眠る家」がある。

寒月下風はハーブを鳴らしゆく 浦川聡子

〔俳句界〕11月号・俳句×音楽より

ドビュッシューの《海》を鑑賞しての吟詠である。掲載誌の「俳句と他の表現とのコラボレーション」を意図しての企画である。《海》は「素描」なのであって、海の描写音楽では

ない。海の流動性を借りてその形相を管弦楽に紡ぎこんでいるのである。作者の断定した「寒月下」は将に慧眼なのである。三楽章を通じて奏されるハーブは、「寒月下」の風に等しいのである。

伝へずに剥がす背中の草風 黒岩徳将

〔俳句界〕11月号・俳句×音楽より

掲句も「俳句と他の表現とのコラボレーション」の企画から生まれた句である。こちらはドボルザークの《交響曲第九番》である。一連の五句は日本の田園風景を思わせる。作者は音律の中に泥臭さを聞き取っているであろう。

あたたかき立冬の空なぞる鳶 稲瀬奈加枝

〔俳句界〕11月号・葛湯より

心洗われるような気分である。実際の暖かい立冬であったのであろうし、「鳶」は大空を「なぞる」ように旋回していたのであろう。実景なのである。ではあるが、やはり作者の心の姿勢が「あたたか」いのであって、暖かさを感じ得る心の構えとなっていたということなのである。

秋の風愁ひ一つを引き連れて 青木鶴城

〔俳壇〕11月号・秋愁より

「愁ひ一つ」であるからこそ、気にかけていられるのであって、やがてこの「愁ひ」は友となり、生きる糧ともなってしまうている。人生の在り様を季語「秋の風」に託して、饒舌に語らない作者の話法に潔さを感じる。他に「金剛杖の上るきざはし萩枝垂る」がある。



十二月号の巻頭句

季音 雪 連嶺の雲は動かず葛の花 矢作水尾

季音 月 「水」の字の蔵のしころや吊し柿 松宮保人

季音 花 着流しに藍の角帯菊日和 檜鼻ことは

水明集 変幻の無数の鱒一と化す 反町修

鼓笛集 長き夜の羊の数は億を超え 持永喜夫

山紫集 濁音を付けて手渡す新豆腐 野田静香

俳誌望見 染谷風子

「橘」

二〇二三年十月号 通巻五五〇号
主宰 佐怒賀直美 発行所 埼玉県久喜市

昭和五三年一月 埼玉県上尾市で松本旭氏を主宰として創刊。師系は角川源義。平成二十七年、佐怒賀直美氏が主宰を継承。本号は創刊五五〇号記念号である。

「巻頭の主宰詠「豆の飯」二七句より五句。

今日のこと話し尽くして豆の飯

緑陰の風の重たき大社

宮青葉号鼓の桴の握り染

神池へ出づ十葉の句踏み

森揺らす音たて暮の去りにけり

第一句、夕餉の一齣か。帰宅した作者が今日あった出来事を奥様に有りの儘に話し、一日が無事に終わった幸せをお二人で噛み締めている。夕餉の膳に緑鮮やかな、さっぱり味の豆飯が出ている。豆飯がお二人の仲を象徴している。次の三句は大宮氷川神社の吟行句である。武蔵一宮の氷川神社は旧官幣大社で約三万坪の境内を有し、櫻や杉の大樹が茂っている。第二句、その緑陰の風を作者は重いと感じた。大社千年の歴史の重みか。第三句、号鼓は神事の開始等に打つ太鼓である。号鼓が幽深な杜の若葉に反響している。桴の握り染に着眼した作者の眼力に敬服する。第四句、十葉は別名蕺菜で

葉や茎に悪臭がある。十葉でなくその句を踏む所に作者の鋭利な感性を感じる。第五句、この森は氷川の杜か、千古の森を揺るがす暮は夏の生命力の象徴と思える。橘俳句会の目指す「感動の焦点化」が随処に窺える二七句である。

「青龍集」自選 三五名 各五句より共鳴句十句。

月光や旅の鞆の鍵探す 石田 京

人声の方に菜園明易し 山口 風樹

河童忌や羅生門趾は葱畑 高良満智子

オリーブの撫ぐる窓辺の風は秋 岸 てる子

片つ端から削る鉛筆七月来 佐怒賀由美子

手鏡に映す濁世や実盛忌 松尾 絃子

土用入済みし話を蒸し返す 田島 良生

愛用の日傘はブルー通院日 栗原 和子

梅雨明やリュックを持って買出しに 中野 昌子

日焼の子朝昼晩と米食うて 斯波 広海

第三句、『羅生門』は芥川龍之介の大正四年の作であり、昭和二五年黒澤明監督の同名の映画がある。王朝末期の荒廃した都と葱の臭みとは何か通じるものがある。第九句、待望の梅雨明の買物に「リュックで買出し」が諧謔。まるで終戦直後。第十句、昔の子供は皆こうだった。健康優良児である。主宰選の「潮笛集」を含め、全体的に身近な素材を的確に詠んだ句が多いと思えた。橘俳句会の益益の発展を祈念する。

山本鬼之介 選

水明集

落日の山嶺映る秋の川
塗椀に出汁の香の沁む冬瓜汁
冬瓜を抱へシंकにどすんと置く
風格の満つる盆栽後の月
流言に惑ふなかれよ月の雲

さいたま 岡田宣子

無住寺の土塀にすがる蔦紅葉
蒼空に奇岩聳ゆる山粧ふ
白風や枯山水の築地塀
刈田道夕陽の中を下校生
毒茸厚化粧して誘ひけり

反町 修

葛の花をんな一途に峠越ゆ
秩父路に熊よけの鈴秋高し
朝露や銀の草はら波立てり
足長の影を追ひ追ひ暮の秋
一頭の秋の蝶ゆく草の果て

さいたま 菅原真理

赤べこの頷く風や吊し柿
枝に結ふ「吉」の御籤や龍田姫
衣被剥いて差し出す賢夫人
連弾の駅の洋琴秋惜しむ
濁手に活くる一枝梅もどき

伊奈 菅原卓郎

露草の青増す朝の湿りかな
奇人住む木戸に絡まる烏瓜
古刹への磴百段にこぼれ萩
西に日の入りて秋の田静まりぬ
露寒の朝の門抜き難し

さいたま 小林京子

土手に立つ独りが嬉し秋高く
デコイチの汽笛のゆくへ秋高し
秋高く人の集まる古着市
一身を投げうつ水辺黄鶺鴒
野路ゆけば廃れ地蔵に萩こぼる

篠崎紀子

古備前に桔梗一茎湯のたぎる
ビショップの墓や谷中のこぼれ萩
いただきに赤き雲置き風の盆
檜岳を仰ぐ蜻蛉の眼の赤し
天平の風鐸揺るる空高し

さいたま 池田珪子

車長持庭に引き出す秋土用
露寒し今朝の厨の和包丁
無患子を拾うて比丘尼羽根を挿す
秋暮れて頭上切り裂くジェット音
沢庵やこもり仕度の四斗樽二つ

さいたま 梅澤輝翠

エプロンの似合ふ女将や衣被
BSの古き洋画や我が秋思
金襴の緞子織り成し龍田姫
龍田姫いろは坂まで遊びくる
洞窟の石仏虚し秋の雨

清水桂子

産土に帰る家なし秋暮るる
仕舞田に煙ひとすぢ暮の秋
歩荷行く尾瀬の木道天高し
槍に立ち見る日本や天高し
夢を追ひ先駆けてゆくかな女の忌

西幅公子

木犀の散りゆく刻の速さかな
旨味ます土鍋のちから栗のめし
秋夕べ虚空とよもす寺の鐘
三峽を巡れば霧の白帝城
フルートの楽のさざ波龍田姫

山岸久美子

柵田守る便り読み読み衣被
洋皿にシエフの絵心秋高し
新しき橋を待ちかね野菊咲く
すれちがふ甘き香りや龍田姫
びーひやらり里の社に龍田姫

越谷 阿部幸代

秋高し田圃アートにミレーの人
秋高しロケット競ふ吉田町
紅葉狩ラトル持つ子やもみぢの手
子が親に渡すバトンや秋高し
山梔子や硬き契りを解く雨

新 暦文

古民家の上がり框に秋の蝶
まちぶせの秋の蚊払ふ夕まぐれ
善悪は人間の性毒草
古書街の秋灯ともし喫茶店
露寒や訃報メールは家族葬

さいたま 元田亮一

歩み寄る心の距離や青蜜柑
自転車のタイヤに秋を満タンに
阿蘇をゆく風は亜麻色花芒
満天の星の深閑蚯蚓鳴く
遠き日の木箱はいづこ林檎むく

熊谷 越田栄子

ビル街の硝子の塔や天高し
鶴鶴の絵馬堂めぐり去りゆけり
吉宗の白馬來れよ天高し
紅葉にそぼふる雨の鞍馬寺
ダリの絵の筆のはこびや秋の虹

さいたま 霜多光代

柏手の響き安らか菊日和
知らぬ間に空き地彩る草の花
下校児やひたすら木の実蹴りつづけ
秋しぐれ古き旅館の格子窓
朝寒や見たる夢みな忘れをり

平塚 丸屋詠子

真つ直ぐに生きて桔梗の佇まひ
秋草を活けたる厨夕日影
安達太良の空へ色増す吊し柿
廃線の駅にコスモス色溢れ
公園の青空文庫文化の日

綿引まりこ

岨道へ松茸狩や深山晴
いさかひは舞茸汁の塩加減
雄蟻螂役目を終へて逃げ惑ふ
釣人が独りの時を黄鶺鴒
振舞は役者の矜持稲穂垂る

さいたま 皆川更穂

めぐり逢ひ弾き合ひして赤とんぼ
渋滞の車列遙かに天の川
括られて風狂ほしき萩の花
小夜更けて鈴虫の音の広角に
さよならと草木に吾に秋てふてふ

本橋稀香

山粧ふ吾も負けじと装へり
山粧ふ道端に笑む道祖神
猪は兄の干支なり背くらべ
猪や地面這ふやに畑荒らす
温暖化進む地球や秋寒し

千坂平通

「お待たせ」と晩秋の蚊の来るうなじ
金閣を燃やすがごとし夕紅葉
南無明神油に落とす新豆腐
エリスてふ名の疫貫ふ十三夜
鼻撫でて洞窟探りをる夜学

森下山菜

出稽古の琴の音ゆらぐ十三夜
あどけなく指先だけを秋の川
古都の秋影道づれに石豊
産土を出でし子の衣の案山子かな
鳩すずめ鴉従へ秋起し

吉川 杉浦千祐

足音が追ひ越して行く暮の秋
愛犬に曳かるる道の露けしや
沢庵の齒ごたへ響く三時の茶
我が手を眺め曲りし指が牛蒡引く
石積みみの棚田明らか星月夜

さいたま 竹澤和子

朝顔の蔓に招かれ遠回り

さいたま 加藤でん治

夕間暮れ鴉急かすや松手入れ
風吹けば違ふ色なり草紅葉
空青み虹あふぎ見て松手入

川口 新井のり子

刈田なる三角ベースタ映えて

遠足の列の後ろを草紅葉

秋刀魚買ふ少し太めを二尾選りて
妻留守の夕ぐれ蚯蚓鳴きにけり

わが内に解せぬことあり白桔梗

独り座す夜寒の居間の広さかな

岡田芳春

若狭 山崎郁子

夜寒夜半眠りの底に身を沈め
施餓鬼会の膳を作るも功德かな

戻りきし気力体力秋涼し
狛犬の台座に赤飯秋祭
秋祭浦人に買ふ焼魚

破蓮や浄土ヶ池に鷺の佇つ
これからは赴くままに吾亦紅

秋祭あの子再婚したらしい
柘榴裂け音なき村の昼下り

流れゆく早さ競うて秋の雲

杉戸 佐々木史女

さいたま 飯田忠男

裏庭や母の実家の鬼胡桃
付け汁に胡桃をつかふ名代蕎麦

どの辺り躊躇で待つ龍田姫
柚道ですれ違うたは龍田姫
虚仮にされ虚仮にされても蓼の花

奥会津陽射しに映ゆる濃竜胆
竜胆を好みし亡き子七回忌

衣被親の苦勞も知らないで
洋洋の人生もまた秋の山

穴場までは和氣藹藹と茸狩り
茸狩父のみぞ知る秘密場所
心細き吾の先を行く秋茜
身に入むや逆縁に泣く細き態
錦秋や箆笥に眠る着物帯

さいたま 山戸美子

新入りの真面目さに惹く濁り酒
手羽先を譲る部長や九月尽
新しき上司と語る酒の秋
病欠の席詰め近く新豆腐
同僚は母となりしか秋の宴

さいたま 吉川拓真

小鳥来る垣の合間の動きあり
めくるめく源氏の君の夜長し
天井の面模様夜長かな
艶やかに葡萄ひとふさ両の手に
色鳥来水面に色を残しゆく

東京 柳父はる

姉嫁ぐ栗山多き隣村
天窓に細き月あり秋さびし
指先の欠けし阿修羅や秋あはれ
縄文の高床に鴉の贅置かる
方丈の広き廊下や鴉日和

山下ユリ子

露草の時を忘るる回り道
球場の目立つ空席秋の風
秋風と語り合ふ如かな女句碑
道の辺の傾ぐ地蔵や秋深む
夕暮れの川洲に残る草紅葉

若狭 岡本祥子

宵闇やちびりちびりと地酒呑む
宵闇のシャッター街を歩きけり
宵闇や小さきカフェよりジャズ流る
乳搾る手の鮮やかや蕎麦の花
蕎麦の花揺れてはるかに赤城山

後記朝香

花嫁舟船頭の背に秋蝶来
新松子若き木霊を宿したり
京町家袋小路に蚯蚓鳴く
草の穂や鉄条網をすり抜くる
秋風や帰りは下る登り坂

松村登美江

秋高し大海原にとんび舞ふ
オカリナの名手奏づる秋の暮
五輪選手目ざして秋の雨の中
岬巡りの崖の地層や暮の秋
車の頭上開けてドライブ良夜かな

森下美智枝

田の実熟れ睨みを効かす案山子かな
日を過ぎて一茎桔梗崩れけり
お日様に実が染めあがる蜜柑かな
晴天に弾け膨らむ綿蒲団
風息に頭上の枯葉戦ふや

さいたま 篠原さよ子

風に揺る木々のささやき秋惜しむ
甘橙の丘の紅葉や明日香風
山辺の道風に添ふ柿簾
聞き做せば「つづれさせ」とや虫の秋
「母」の語を封印の孫秋五度

春日部 仲田利子

踊り終へて胸元熱き帯を解く
松手入れ匠の指のしなやかさ
男体山のうしろ姿や草紅葉
親子鹿さつと隠るる草紅葉
わだかまり解けて見上ぐる秋の月

川口 田村福美

墓仕舞しての安堵や暮の秋
始発バス待つ髪に眼鏡に露の玉
仕事終へ秘湯の宿へ洒落てみる
九十歳の手編みをもらふ小六月
味を占めたるプロの沢庵待ち望む

さいたま 小川洋子

爽やかや紙の切符で乗る列車
みみず鳴く牛舎の隅の豆電球
保育士のこはごは触る赤とんぼ
鯛雲画家住む家の赤き屋根
それぞれに具材持ち寄り芋煮会

さいたま 湯浅 和

地虫鳴く鳴けば消えゆく愁ひあり
虫よ鳴け心ゆるみを良しとせず
終らむと美しく落ちゆく醉芙蓉
夫婦碗はたとひとりか秋暮るる
夕野分雲過ぎゆくを漠漠と

小山あつ子

急ぐ帰路空はグレーの鯛雲
遊歩道猫身震ひの露時雨
冬瓜食めば丸く治まる腹の虫
冬瓜を噛みしめ想ふ妣のこと
翅伏せて何を思案や赤とんぼ

綿貫ひさの

語らひて呑み込む余生夜寒かな
吾亦紅手向けて墓で口ずさむ
薄藍の山にあけほの秋静か
秋深し作り笑ひのにはか雨
彼方より一筆便りの夜寒かな

鈴木香音子

爽やかや青年僧の辻説法

さいたま 大熊健司

缶蹴りの缶蹴る音や秋高し

栗飯の栗ばかり食む四歳児

さいたま 高原和子

小三治の枕聞き入る夜長かな

栗拾ふ遠き日友と競ひしや

長き夜の古地図に疼く旅ごころ

秋さびし隣家の雨戸閉づる音

秋晴やどつと声湧くジャグリング

言の葉を集めて匂ふ金木屋

糸井しるく

青空の開会宣言運動会

樋口元美

露時雨朗報待ちの吟醸酒

直売所冬瓜ひとつ残りけり

那須岳の稜線踏むや露時雨

冬瓜や作り手の名は吉田さん

金木屋夕陽揺蕩ふ小窓にも

露時雨剣葉の先の雫落つ

道の駅冬瓜坐して客を待つ

瓦にはうつすらべール露時雨

慶びも哀しみの日も菊の花

東京 畑宮栄子

来てくれたる娘に白髪夜寒かな

羽島秀子

菊日和そぞろ歩きの三姉妹

何気無き友の一言夜寒かな

菊月夜ベルギー土産のチョコレート

晩学の食卓の隅吾亦紅

ひよつこりと垣根のすき間彼岸花

作り手の顔の見ゆるや新走り

墓洗ふ無沙汰を詫びて念入りに

木犀の香りの中のノクターン

茅屋根の軒濡らしたる時雨かな

さいたま 持谷寿夫

むさし野の朝あしたならぶ罽雲

石関六弦

古町の障子に映る後ろ影

秋風やしばし竹む太鼓橋

雨やみて夕陽浴びたる稲田かな

秋澄むやスコアボードにならぶ零

一人旅ホームを濡らす秋時雨

目が会へば自慢話に寄る鶴鶴

輪行や稲田の駅に降り立ちぬ

シャッターの続く家路やそぞろ寒

色鳥の赤青黄色見え隠れ
墨絵なる兼六園に色鳥来

色鳥や人も獣も争へど

駅前の喧騒を抜け夜長かな

夜長には祈ることごと多かりき

東京 山中いちい

さいたま 秋谷風舎

天高し出生届に「おめでとう」

蚯蚓鳴く別れも告げず友逝けり

自販機の暗夜の光蚯蚓鳴く

稲刈の畦にしやがんでにぎり飯
祝ひ膳折鶴添ふる七五三

さいたま 武田重子

所沢 関根千恵

竹の春参道に選る土鈴の音

竹の春弥勒菩薩に会ひに行く

天辺に揺られてみたし竹の春

とろろ汁揉海苔香る益子焼

肩肘を張らずに生きてとろろ汁

森 和子

さいたま 香田裕誌

秋高し日差し無色に降り注ぐ

モノトーンの背黒鶴鴿かつこよし

松茸めし胸に馥郁たる香

吾亦紅あちこち向いて自己主張

取説が解せず隙取る夜長かな

鳴海順子

枚方 寺内洋子

マンションが案山子の前に立つてゐた

露時雨日は遠山に足は野に

露時雨世に気兼ねなき野宿かな

甘言に夢見心地や濁酒

小町桔梗小町といへば恋の歌

初時雨雨の匂ひの猫とほる

雪でなく螢でもなき雪螢

眼裏の女神の姿山眠る

厳しくて激しい男冬將軍

小春空まんまる屋根の美肌の湯

老友と酒酌む夜分虫の声

朝顔の紺に劣らぬ白さかな

バイデンと岸田の案山子寄り添へり

野仏に供ふる唐黍コップ酒

つくねんと過ごす一日虫時雨

季節やうやう正気に戻り十月来

残業の娘の愚痴や火恋し

糸のころの穂だけに風のありにけり

この世全て事もなしよと糸のこ揺る

教師の声尖り運動会近し

婆転び芋の遊べる斜面畑

さいたま 森美枝子

藤 沢 小島喜代子

芋の葉に煌めく星のひとかげら

垣根より取りて炊き込むむかご飯

熊除けの鈴を頼りに秋の晴

金木犀ひたむきに生き九十五

秋晴や何やかんやと出づつぱり

いくつかの再会あるか敬老会

秋鯖や馴染みし店の角の席

中秋の名月隠す雲憎し

炎天下終まで履かむと靴を買ふ

火恋し急ぐ心に車列かな

和歌山 南條きわゑ

さいたま 横山礼子

火恋し夜の静寂我一人

大冬瓜抱へてちやうど子の重さ

山紅葉傘寿の足の軽やかに

百年の孤独よ庫裏の冬瓜よ

少年の蹴る球伸びる秋の空

如何にして論破できやう冬瓜や

離れずに道案内か赤蜻蛉

猫の背の濡れたりさては露時雨

ジーンズの藍の匂ひや露時雨

宮 代 関谷多美子

落合和枝

夕日射すせせらぎ野菊あふれ咲く

とろろ汁大播鉢に母の影

屋敷林雲棚引きて秋高し

はつか餡舐りてめぐる竹の春

カルストの丘なだらかに秋高し

竹の春指輪が光るクラス会

八冠の将棋プリンス濃りんだう

はらからが卓袱台囲みとろろ汁

十月や神の望みは人の幸

何時の間に鈴の音消えて竹の春

日の暮れの風が連れくる秋の声

行く秋の灯り恋しき薄暮かな

尾花の穂光を取りてそよぎけり

百舌鳥日和夫をせきたてハイキング

満月や光あやつり雲透かす

憂き事を忘れ去らむと月仰ぐ

秋の色頂から下りパレットに

行く秋を惜しみて今日を小さき旅

いわし雲頭上いつばい散開す

別れ際熱き握手や濃竜胆

和歌山 嶋田洋子

廃線のトンネル抜けて露時雨

さいたま 小駒さち子

露時雨鬼押ししの奇岩にも

冬瓜の透明感や食そそる

冬瓜や酸いも甘いも老夫婦

萩の花辿りて行けば友の家

山梔子を二三度つつき鳥発てり

山梔子や浮気を吐かぬ男の口

秋の雲芝生に描く影の妙

OB連打も「なんくるないさ」秋の雲

どこからか笛の音聞こゆ秋の雲

さいたま 北出久美子

秋時雨友のメールに直ぐ返す

駅手前傘広げさす秋時雨

バス灯す赤き標や秋寂びし

スケボーの縫ひ行く径や秋日向

鈍行に揺られて秘湯秋麗

鈴木藻好

木谷葉子

池に落ち浮ぶどんぐり沈むどんぐり

頬一杯団栗詰めて栗鼠遁る

鬼やんま勝負勝負と網一閃

「続トットちゃん」一気に読みぬ夜長かな

茜空とんぼの家はその向かう

駒谷行雄

石井直子

秋の蚊やラストチャンスの痒さあり

名残惜しふるへる花卉秋の風

瞬ける秋の星座やジェット行く

愛されも嫌はれもせず猫じやらし

尻尾立てまっはる猫や秋の暮

大阪 飯塚智恵子

鈴木敦子

淡き伸贈り贈られ冬近し

晩酌は夫の葉や冬近し

露草をためつすがめつ「富太郎」

木道や小田代原草紅葉

柿日和実ひとつ残し剪定す

妹はいつも聞き役螢草

半眼の動かぬ烏冬隣

冬近し隣の庭のバーベキュー

木道を霧流れくる弥陀ヶ原

大岩に架かるメ縄秋の海

楽隊のジャンボリミッキー風爽か

団栗に笑顔を描く子の笑顔

団栗の発根を待つ小学生

藍色のシャツに輝く赤い羽根

ずつこけて触れたる地面そぞろ寒

ひとり酒人肌恋ふる夜寒かな
「とよなら」と独りぼつちの駅夜寒
吾亦紅父より長く生きてをり
吾亦紅真直ぐ生きると母の声
手足冷え動かぬ指の朝寒し

草加 持永喜夫

チェーン切れの自転車重し蚯蚓鳴く
蚯蚓鳴く山村の端に変電所
気がつけば坂の天辺蚯蚓鳴く
面会を終ふるも残る林檎の香
林檎手に救命講習申し込む

所沢 飯室夏江

書きそびるるお札の手紙蚯蚓鳴く
新品の化粧水沁む蚯蚓鳴く
蚯蚓鳴く下山の人の明かり揺れ
艶めく林檎残り五分の品定め
家族総出りんごもぎ取りコンテナに

さいたま 緒方みき子

秋風の古道を行けば我無心
天高し神御座します那智の滝
花入りに凜と立ちたる螢草
キッチンにアップルパイの香冬近し
冬近し年中行事の渋皮煮

さいたま 三浦真由美

赤とんぼ時々首をかしげをり
稲雀誰を待つのか日暮どき
秋風やしりとり歌のなつかしく
ふる里の母より届く今年米
甘柿を片手で持ちて帰る朝

鬼石 加藤ナヲ子

捨て案山子寄りてねざらふ鳥のゐて
旅先の桔梗に弾む会話かな
手も足も出せぬ案山子や子ら寄りぬ
新薬の編笠いまかいま待つ

川島夕峰

亡き母の日記の恋バナ梔子の実
内緒ごと誰にも話せぬ梔子の実
恋はマジソン郡の橋梔子の実
染上手自然由来の梔子の実
黄金のきんとん美食梔子の実

さいたま 北山建治郎

秋寒や多色の苗に足を止む
昨年のあの服捜す朝寒し
そぞろ寒めくる暦はあと二枚
くぬぎの実もじやもじや帽子の人気者

小田三茅

月白の路地に静まるベンツかな
碧眼に映し留めよ今日の月
おみくじに「自重」の朝よ露の玉
週末の現地集合猫じやらし

大阪 遠藤人美

送る先ひとつ減りたり栗実る

鬼石 榊原聰子

かやの実や五百羅漢の首いづこ

秋の雨公園に人影のなし
濡れそぼる鏡の道に初紅葉

湘南や今夏で居住半世紀

藤 沢 藤田寛二

菌の乱今年も負けず盆踊
萩の門厳しい仁王出迎へる

☆

☆

水明通信

I love you 考

駒谷行雄

漱石の有名なエピソードとして、英語教師だった時に生徒に問われて「アイ・ラブ・ユウを「あなたを愛していますなんて日本では言わない、『月が綺麗ですね』とでも訳しておきなさい」と言った。と言うのがある。(都市伝説だという話もあるが)

先日NHKのクールジャパンと言う番組を観ていた。その時はいつもの外国人の出演者のほかにその連れ合いと一緒に出演していた。ある日本人の夫が会って間もないころの外国籍の妻に「『アイ・ラブ・ユウ』と言ったら、『あなたとはまだそんな関係ではない』と言いつ返された」というような話をしていた。それに同調する夫婦も複数いた。

彼等が言うには「アイ・ラブ・ユウ」は互いに心から信頼しあつて何事も許しあえる間柄になつて使える言葉なのである。2〜3回手をつないで一緒に歩いた程度では言つてはいけない。逆に言えば、男女間だけではなく親兄弟や同性の友にも使うことができる言葉なのだ。夫婦であっても毎日のようにその関係を確認しあうのが普通なのであろう。

そうしたことを知つた後、これもテレビで洋画を見ていたら、駅のホームで出征者を見送る場面で、列車に乗り込もうとする弟を兄が抱きしめて「アイ・ラブ・ユウ」と言つた。なるほどそういう時に使う言葉なのだ。その時の字幕には「死ぬなよ」とあつた。名訳だと思つた。

翻つて漱石は、まだ付き合いが浅いから好きだなんて言うわけがない、訳すとしたら「月が綺麗ですね」程度だろう、といったわけだが……。どうも誤訳したようである。

作品評

山本鬼之介

園風景を呈している。そうした景色の中を、中学か高校の生徒が下校して家路についている。徒歩の生徒の脇を自転車の学生が抜いてゆく。脇から照らす夕陽が生徒の顔を赤く染め、精悍な風貌を作り出している。

風格の満つる盆栽後の月 岡田宣子

筆者が現役サラリーマンの頃、顧客であった大手石油会社の資料担当者がかんりの盆栽通で、訪問する度に盆栽のことを聞かされ、ずぶの素人の身としてその返答に四苦八苦した思い出がある。その後その方は、趣味としての盆栽いじりに飽き足らず、退職して盆栽の店を開いた。趣味・道楽もここまでくれば大したもので、その店を訪問して祝意を述べた。

さて、掲句に書かれた風格に満ちた盆栽は、筆者が以前大宮の盆栽博物館で観た松の盆栽と同じ様なものであろうか。毎日の日課として決まった時間に手入れに勤しみ、見事な枝振りに眼を細めて枯淡の境地にいる人物像が浮かんでくる。秋たけなわの名月が照らし出す松の盆栽は、日中とは違った風格のある姿を見せていることであろう。

刈田道夕陽の中を下校生 反町 修

辺りを黄金色に染めていた稲が刈り取られて広々とした田

一頭の秋の蝶ゆく草の果て 菅原真理

蝶の数え方が何故「頭」なのか。一般的には「匹」や「羽」でもよいが、学術論文などの正式な場においては「頭」と表示するとされている。「頭」の数え方の理由については幾つかの説があるようだが、この句が醸し出す雰囲気を咀嚼してみると「頭」が相応しいように思えてくる。

春に成虫となった蝶が、苛酷な夏を乗り越えて秋になっても活動している。その場所は、何処まで続いているのか判らないような広々とした草原である。時たま翅を休め、何かの目的を持っているかのように飛び続けている。そこに人間の姿が投影されているかのようで、感動を覚える景である。

衣被剥いて差し出す賢夫人 菅原卓郎

衣被は、茹でた芋の上下が包丁で切られていけば皮を指で挟んだだけでつるりと剥けるのだが、もしそうならないなけば、剥くのに少々手間がかかる。

サラリーマンが上役の家に招かれたとする。上役の妻は、

昭和の戦前の主婦を思わせるようなきりつとした風情の女性で、そうかと云って冷たい感じは無く、にこやかに来訪者を迎え、夫を立ててきびきびと立ち働いている。ビールに続いて酒、そして、手料理の肴が次々と運ばれてくる。その一つがまだ温みのある衣被で、きれいな指で皮を剥いてくれる。少々やり過ぎの感があるものの悪い気はしない。以前読んだ小説の中の「賢夫人」の言葉を思い出している作者である。

奇人住む木戸に絡まる烏瓜 小林京子

広辞苑によると、奇人について「性質・挙動が普通の人はちがった人」と説明されている。隣近所の人との日頃の挨拶や外出時の服装や挙動など、皆が一様に奇人扱いをしている人物である。その人が住む家には、垣根の間に風流な木戸があるのだが、そこには烏瓜の蔓ががっしりと絡まり、折角の木戸が用を為さない。初秋に白い花が咲いてやがて実が生り、縞模様の緑色から熟れて朱赤色に変わる。何となく不気味な人物ではあるが、毎年季節ごとに変化する烏瓜がせめてもの救いになっている。

野路ゆけば廃れ地蔵に萩こぼる 篠崎紀子

廃れ地蔵と言うからには相当古い年代に作られた地蔵様であろう。このような古い野仏にごく自然に出会える場所とし

て筆者が先ず挙げたいのは長野県の安曇野である。大分以前のことになるが、安曇野の野路を歩いていて沢山の野仏に会い、一体一体の素朴さに惹かれて言葉を交わしたくなるような気持になった。掲句の地蔵様も、数百年もの歴史を経て欠け損じた鼻や耳、そして、風雨や風雪に曝されて摩耗した顔面など、見る影もないお姿であるが、今なお道行く人の安全を守護してくれているのであろう。古地蔵を労るように次から次に萩の花が降り注いでいる。

天平の風鐸揺るる空高し 池田珪子

昔聴いた奈良の復元された平城京朱雀門の風鐸の妙なる音が忘れられない。大甍の四隅に吊された風鐸が、秋の清らかな風に揺れていた。天平の風鐸とあるからには、奈良の大刹の唐招提寺・薬師寺・興福寺などを思い浮かべるが、碧く晴れわたった空を背景にした風鐸の景色は、想像しただけで感動する。

エプロンの似合ふ女将や衣被 清水桂子

女将の手料理で流行っている小料理屋であろう。和服に割烹着の日もあるのだろうが、今日は洋服に洒落たエプロンの姿である。カウンターの上の台には、大皿に盛った本日のお勧め料理が数種類並んでいて、客が好みの料理を注文する。

開店してしばらくすると、『あら残念ね売り切れちゃったわ』なんて言われる品もあり、店の繁盛振りが見えてくる。移り変わりの激しい居酒屋チェーン店が幅を利かしている現今において、このような懐かしいむかし風の店を大歓迎する筆者である。今、茹で立ての衣被が出て店が佳境に入った。

秋夕べ虚空とよもす寺の鐘 山岸久美子

幼稚園や学校、公園から聞こえてくる子供の声がうるさいと行政機関に苦情を持ち込む人がいると聞き、そのように世知辛くなった世相を嘆く昨今であるが、朝晩の時を報せたり大晦日の行く年来る年の日本の文化であった梵鐘までもが騒音の対象になっていることに憤りを隠せない。

秋の夕陽を浴びて群れ鴉が巣へ帰ってゆく空を、寺院の釣鐘の音が響き渡ってゆく。いつまでも続く余韻。泪が出るほど嬉しい音である。

子が親に渡すバトンや秋高し 新 曆文

秋季運動会の一齣であろう。昔は、春の遠足と秋の運動会が学校行事の決まり事になっていたが、今はその実施時期がまちまちのようである。本句は、親子競争で子から受け取ったバトンを親ががちり握って力走する場面であるが、張り切りすぎた親が勢い余って転ばないかはらはらしている子の

姿が見えるようだ。

車長持庭に引き出す秋土用 梅澤輝翠

「秋土用」は晩秋の季語であるから、朝晩いくらか寒さを感じる陽気かと思うが、日中は秋晴で夏の虫干に似た行為を詠んだ俳句かと思う。車箆箆は識っていたが車長持は識らず、広辞苑の絵付き解説を見て合点した。この大型の長持には恐らく親が遺していった古い衣装などが入っていると思われるから、長持の風袋を加えるとかかなりの重量になるだろう。車が付けられているとしても、屋内から庭までの移動にかなりの労力が必要だと推察する。なかなか面白い題材を詠んだ俳句である。

仕舞田に煙ひとすち暮の秋 西幅公子

刈り入れが終わった田圃で残っていた籾殻や藁を燃やした煙であろう。季語の持つ雰囲気に加え、稲刈りの活気に満ちた情景とは正反対の静かで物寂しい景色が見えてくる。風のない夕暮時のひと筋の煙が印象的である。

すれちがふ甘き香りや龍田姫 阿部幸代

佐保姫や雪女などと同様に、龍田姫も詠みにくい季語の一つである。奈良にある龍田山を神格化して秋の女神にしたも

のであるから、山そのものを詠む訳にはゆかず、女神ニ妙齡の女性というイメージで作句するのが一般的なのであろう。本句もやはりそう云う視点で詠まれたものと解する。秋もたけなわの或る日、郊外に出掛けて路傍で行き交った女性から伝わってきた芳香を、龍田姫のイメージとして捉えた俳句である。

古民家の上がり框に秋の蝶 元田亮一

移築して保存されている古民家であろうか。昔の頑丈な部材が使われたどっしりと風格のある民家を想像する。長尺の梁に太い柱、元は庄屋の屋敷であったかも知れない。磨き抜かれた玄關の上がり框に翅を休めている秋蝶は何を思っているのでしょうか、訊いてみたくなる雰囲気を醸している。昔この家に住んでいた人の化身かと思うほどその場に溶けこんだ蝶である。

自転車のタイヤに秋を満タンに 越田栄子

正確な表現としては、「自転車の車輪のチューブに空気をいっぱい注入した」ということであるが、俳句の表現として、車輪とチューブを一緒にして「タイヤ」としたのだと思う。「秋を満タンに」は、空気を注入する行為と共に、秋たけなわの季節感と作者の高揚した心の内を言い表している。

拍手の響き安らか菊日和 丸屋詠子

神社に参拝し、神前できちんと二礼二拍手一礼の所作をした時の気持の安らぎはまことに快いものである。澄みきった秋の大気を震わせる拍手の響きは、参拝者の心を高揚させる。折から、神社の境内で菊花展が催されていたのであろうと思う雰囲気が伝わってくる一句である。

釣人が独りの時を黄鶺鴒 皆川更穂

川釣りをしている釣人であろうか。川の上流の穴場で、思うがままに独り糸を垂れている。秋も半ばとなり、周りの木々の紅葉が進んでいる。大自然の中で思うがままに己の時間を謳歌している。狙いの魚が掛からず退屈していたら黄鶺鴒が飛来し、長い尾を振って応援してくれた。

山粧ふ吾も負けじと装へり 千坂平通

近隣の山々が色づき始めた。いよいよ紅葉の季節到来である。紅葉が里まで降りてくるには少し間があるが、紅葉狩のシーズンに備えて我が身吾が心を錦に染めてゆこう、と云う心境の俳句であろうか。ちよつとかつこ良すぎるが、伊達男の作者だからよしとしよう。

水琴窟

(十一月号鑑賞)

池田雅夫

鈴生りの荔枝我が家の一大事

緒方みき子

「荔枝(れいし)」は苦瓜、ゴーヤともいう。異常に暑かった今年の夏。夏バテしないようにと荔枝を植えたのだろう。充分に水遣りをした甲斐あって、みごとに「鈴生り」の豊作であった。「一大事」に滑稽さを感じられて微笑ましい。

部屋奥へ庭木を映す西日かな

綿貫ひさの

「部屋奥へ庭木を映す」とはどういうことかと、一瞬戸惑ったが、「西日かな」で、ああ、西日が部屋奥まで射し込んでいのかと納得した。地平線の近くまで傾いた西日でないかと奥まで影が届かない。庭木の影が暑さを柔らげている。

秋めくや庭師帰りし後の風

森下美智枝

八月も末になると、どこことなく秋を感じる。うつそうとしていた庭がすつきりと形づくられた。「庭師帰りし後の風」に、庭を吹き抜ける秋風を実感したことが表われている。

「ごめんね」と言へずなみなみ注ぐビール

嶋田洋子

テレビのコマーシャルで見たような光景である。掲句の場合、「ごめんね」と言へず」と、「なみなみ注ぐビール」の二句一章が好ましい。父と娘であるうか。素直に謝れずにビールで取り繕っている。その苦味は格別なものだろう。

怒ること窓たたくなり大夕立

高原和子

「怒ること」の措辞に魅かれた。夕立の前兆として冷たい風が吹くことがある。突然に黒雲が空を覆い、大粒の雨が降る「大夕立」。強い風を伴って窓にたたきつけているのだろう。「窓たたくなり」の言い切りも効を奏している。

黒髪の母の元気や鰻食ふ

小駒さち子

「黒髪の母」と改めているからには、ちよつと高齢なのであるう。歳相応にはとても見えない若さの秘訣かも知れない。高齢化社会において長寿の人が断然に多く、一〇〇歳を越えた人が多い。「鰻食ふ」を「鰻めし」としてはいかがが。

御包みの手足のうのう秋初め

持永喜夫

「御包みの手足のうのう」が微笑ましく思える。暑さもようやくやわらいできた「秋初め」。御包みを着せられた赤子が「手足のうのう」と伸ばしている姿が見えるようだ。

幼子のいたづら増ゆる晩夏かな 石浜悦子

夏の盛りのころは、その暑さでとても外で遊ぶことができ
ない。夏の終りが近づき、どことなく秋の気配が感じられる
「晩夏」。「幼子」も外で思いっきり遊ぶことができる。弾け
るような笑い声に大人たちも元気をもらっているのだ。

深井戸に西瓜つり上げ覗く間 羽鳥秀子

昭和のよき時代の真夏には「西瓜」を井戸の中に吊して冷
やす風習があつた。冷蔵庫のない時代である。「深井戸」の
中は温度が低く西瓜を冷やすのに絶好であつた。できた旬に
満足せず、語順を変えるなど推敲することも楽しみである。

生きてゐるあかしと友の桃届く 山下ユリ子

桃の産地に住んでいる「友」であろう。毎年のように、そ
の時期に送ってくれる。お礼を述べると、「元気でいるうち
は送るよ。生きている証だ」などと応えてくれる。お互いに
健康であることを喜び感謝して励まし合っているのだ。

山頂に日の出を拝む夏の山 武田重子

「ご来迎」あるいは「ご来光」は季語とされているが、あ
えて「夏の山」を選択している。それは「山頂」に辿りつく
までの難儀を表したかったからであろう。幻想的な瞬間。

学窓にゴーヤカーテン子らの歌 飯室夏江

近年、夏の強い日射しに対し、「緑のカーテン」と称し、
「ゴーヤ」などを窓のところに植える風習がある。ゴーヤは
実を食べるので一石二鳥という訳だ。「子らの歌」から、小
学校の音楽室の窓であろう。中学校の合唱部かも知れない。

意気揚々朝顔市の鉢を提げ 関谷多美子

掲句には人物が特定されていない。だからこそ、「中年夫
婦」とか、「初老の爺さん」などという想像できる。買
い求めた「朝顔市の鉢」を「意気揚々」と提げて歩いてく
るのは子供連れの若い夫婦かも知れない。躍動感がいい。

晩酌に鯊の肴の取合せ 糸井しるく

秋になると「鯊」も大きく育ち、十四〜五センチになり、
釣り人に喜ばれる。自身で釣ってきたのであろう。帰ってき
てすぐさま捌き、「晩酌の肴」としたのだ。「鯊の肴の取合
せ」とまで云わず、「鯊の天ぷら釣自慢」で一献傾けたい。

シヨウウインドー季節先取り秋暑し 小田三茅

長い夏が終わり、ようやく秋になったものの残暑はさらに
つづく。街の「シヨウウインドー」には季節を先取りした厚
手の衣服が飾られている。語順を変えて流れをつくりたい。

大村節代 選

鼓
笛
集

初鏡卒寿の紅をうすく引き
三味の音は初心四温の隣家より
冬萌の土手に伏せたる舳ひ舟

佐々木史女

小夜時雨淡き記憶の子守歌
日向ほこ手遊び歌の「せつせつせ」
子供等の声の弾むよ手鞠唄

越田栄子

指で割る桶底の空初氷
ぐいぐいと引くシエパードの息白し
夜廻りの音過ぐるまで門灯す

森 和子

忘れられ暮れゆく山の熟し柿
晩秋や夕日の荒ぶ閑所跡
落武者の墓埋むるほど朴落葉
狐火や王子稲荷の真暗がり
黙々と祖母の秘伝の納豆汁
上げたるはずの足がもつるる冬の庭

霜多光代

秋高し羅白の道に光射す
義姉に背を押されて歩む野分かな
帰り道遠く感ずる暮の秋

丸屋詠子

肌寒や人間ドック了へて雨
面会てふ他人行儀やそぞろ寒
見舞ひては一人の帰路の夜寒かな

本橋稀香

石路の黄色黄色に斑が少し
雲流れあさま山には初冠雪
風よ吹け燦々と陽よつるし柿

榊原聰子

阿蘇望む草紅葉なか露天風呂
冬の朝四方八方湯けむりが
金鱗湖を囲む紅葉や水鏡

森下美智枝

冬ぬくし絆深まる七人旅
冬立つや馬齢かさねて己知る
小春空白き富士の嶺見え隠れ

川島夕峰

あの日から吾も心寄す花八手
茶の花や小間の柱にただ唯一枝
何気無く心沈むや夜の霽

綿貫ひさの

たこ焼や雀のお客夕時雨
みづたまり雲を留めて色落葉
陰陽師落葉縁取るみづたまり

飯塚智恵子

赤門に銀杏落葉の降りしきり
おみやげは花をねだりて神の留守
閑や自転車漕ぐを抜き去りぬ

山中いちい

麗人のかすか酔ひをり黒シヨール
散紅葉そも鮮やかな強羅の地
侘助に内緒話をささやきぬ

小山あつ子

水鳥や仲睦まじく肩よせて
秋雨や紀伊の山並遠景に
微笑みし福寿のつどひ秋深し

南條きわゑ

ひだまりの生成り色足し毛糸編む
毛糸編むそのひたむきの重さかな
解かれて明日も波うつ毛糸玉

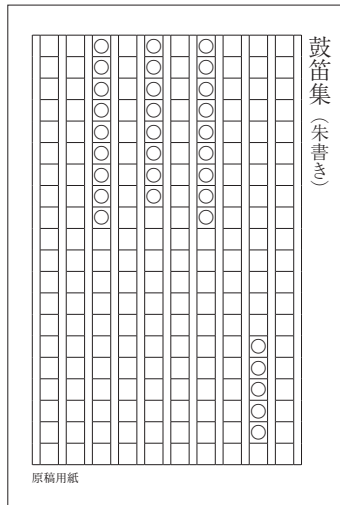
遠藤人美

啣へ脱ぐ手套美し手は更に
長マフラー二人で巻きし闇路かな
眺へのブーツの歩幅五寸増し

横山礼子

鼓笛集の書き方

- 俳句は四行目からお書き下さい。
- 二百字詰原稿用紙をお使い下さい。



鼓笛集作品評

大村節代

三味の音は初心四温の隣家より 佐々木史女

三味線は楽器の中でも難しいと言われている。隣人が近ごろ三味線を習いはじめたのか、手始めの三味の音が気になる。あるところで、必ずつかえて弾き直す。ああまたと溜息をつく。三線が聞こえないと、ほっとする反面、何か物足りなく思う。春までには必ず、上達するだろう。

小夜時雨淡き記憶の子守歌 越田栄子

誰しも幼い日に、子守歌を聞きながら眠りについた思い出があるだろう。歌手のように上手な歌でなくても、母の子守歌を聞きながら眠る幸せは、幼子の特権であろう。思い出せば、幸せな時が甦り、そっと子守歌を歌ってみる。

鼓笛集巻頭（十二月号）

私の好きな一句（自句自解）

持永喜夫

春浅し欠伸ひとつの渡し舟

小さな港町で生まれ、皆んなで渡れば恐くない団塊の世代です。しかし、人生最後の帰り舟は一人、舟上にて太平楽を言い、長閑に転た寝している間に霊界への渡し舟は対岸へとこの思いで詠んでみました。

夜廻りの音過ぐるまで門灯す 森 和子

「火の用心」と拍子木を鳴して夜の町を見廻る人々。その人達のポランティアの心に共鳴して、通りすぎるとき、そっと頭を下げ、拍子木の音が遠のくまで、門灯をつけておくという作者のやさしさ、だから町は、地域は、平和なのだ。

句集喝采

曲淵徹雄

◆館野 豊「時の影」

ふらんす堂

著者略歴 昭和三十年横浜生。昭和五十一年「雲母」入会。平成五年「白露」創刊入会。平成十年第二回白露評論賞。平成十四年句集「夏の岸」。平成二十三年第六回白露評論賞。句集「風の本」。平成二十五年「郭公」創刊入会。評論集「地の声 風の声」形成と成熟」。NHK学園俳句講座専任講師。

著者の第三句集。平成二十三年から令和四年までの十年余りの三一一句を収載。

たましひのはばたき聴かん秋の空
句友・三森鉄治へ哀切の追悼句。

友の国師の国甲斐を春の風

前句の六年余り後の作。句友・鉄治、師・飯田龍太、廣瀬直人を送った甲斐の今をつつむ春の風。「時の影」を思う。

一月や磯の鳥居へ波しぶき
梅雨晴や躰の屋根の風見鶏
檻の鶯青空の鶯寒明くる
放課後の空へ口笛日脚伸ぶ

以上四句、名詞・助詞と季語のみの作句で引き締まった句。淡淡と詠うなかに景の動きと作者の心情が伺える。

「源流の風と育ちて青胡桃」、「梁に山犬の護符雪しまく」は、風土に根ざした句。

著者の人間味を感じる句に、「あたたかや手を振つて舟すれちがふ。」「白雲を追ひ遠泳の生徒たち」。他に、「降るとなき雨のまつはる羽抜鶏」、「みな帰りたる校庭の花吹雪」など。

◆田中位和子「銀の柄杓」

書肆麒麟

著者略歴 平成三年、夫の転勤に伴い香港に移住、香港日本人クラブ俳句会に入会。俳句初経験。平成七年帰国。幾つかの結社を経て、平成二十八年「円錐」に入会。

著者の第一句集。俳句を初めて以来の句、一七六句を収載。句集名は、「言の葉を銀の柄杓に汲む月夜」より。

廃村や戸に春聯の残りたる
物乞ひの恵比寿顔なる三尺寝
天高し九龍城の崩れゆく
客家帽ゆらし落葉を掃き寄せる
惜別の春の宴の果てもなし
以上五句、香港に移住した作者が新鮮な目で捉えた句。

見習ひの秋日にかざす鉋屑
古井戸の角が常座のちちる虫
触れ太鼓川に落花のお練りかな
Tシャツのロゴとなりたる汗の染み
レモン一個廓名残りの町に買ふ

第一句、第二句は写生してすんなりと一句に。第三句〜第五句、写生を基本に発想して、粋な切り火打つらむ能始、

他にも魅かれる句に、「冥府へも切り火打つらむ能始」、「春立つや自作自演のト書練る」など。

大道を飛び六方や浮かれ猫
作者はこれからも俳句の大道を颯爽と進んでゆかれることであろう。

網野月を選

山紫集

山の端に夕陽輝き木槿散る

山下ユリ子

白木槿角のパン屋に忌中の字

石田慶子

古びたる母校励ます花槿

丸屋詠子

白木槿思はぬ言葉「あんた誰」

元田亮一

棲を取る舞妓の紅や白木槿

青木鶴城

辻に立つ今日も笑顔の木槿かな

秋谷風舎

花木槿蕾のごとく落花せり

後記朝香

木槿の白棋士一瞬の蒼白

綿引まりこ

木槿垣田家主の気骨かな

新 曆文

底紅やお披露目の日のおちよぼ口

日高道を

あたふたと娘ら発てり花木槿

阿部幸代

日記には暫し木槿の花の数

飯塚智恵子

玄室と覚しき穴や花むくげ

荒井俱子

秩父連山見ゆる小径の夕木槿

野村美子

朝露にぬれし木槿の白さかな

飯田忠男

底紅や開きしままの三面鏡

森 和子

楼蘭の廢墟はるかや紅木槿

池田珪子

—以上特選

花木槿五百羅漢の泣き笑ひ	池田雅夫	書道塾と木の札今も木槿垣	熊倉千重子
代行の教師うつくし白木槿	石川理恵	白木槿紅差指でそつと触る	河野はるみ
尼寺の紅を尽くして大槿	井上燈女	木槿垣子猫するりと抜けていく	小駒さち子
道の辺の木槿の花をいとほしむ	井上玲子	夢で逢ふ懐かしき人白木槿	越田栄子
木槿垣猫の駆け込む道があり	上戸千津子	新幹線のあの子が定年花木槿	後藤綾子
紙屑に溺れさうな部屋白木槿	内田恵子	底紅を投入れ亡き師憶ふかな	小林京子
底紅や紅筆持つ手定まらず	梅澤輝翠	閑かなりほとと落ちゆく花木槿	小山あつ子
払暁のむらさき木槿いとほしむ	梅澤佐江	花木槿コリアン街のチマチヨゴリ	近藤徹平
隠岐の海一望にして白木槿	大場順子	移住宅のリフォーム進む花木槿	榊原聰子
花木槿今日一日を無事に過ぐ	岡田宣子	底紅の花床の間亡き娘一周忌	佐々木史女
行商が門の木槿を誉めにけり	加藤でん治	木槿咲き売地の札の傾ぎけり	笹本啓子
一日で咲き落つ木槿や未練なし	川島夕峰	失脚の坂で木槿の気ままなる	篠崎紀子

一日に誠通すや白木槿

篠原さよ子

隣人とは仲よくしたし木槿垣

瀬戸雄二郎

無人駅カムサハムニダ花木槿

渋谷きいち

「アリラン」の歌が聞こゆる木槿垣

染谷風子

木槿咲く並木過ぐれば今日の宿

嶋田洋子

白木槿琵琶を奏づる隠遁者

反町 修

まちまちに向きてひと日の木槿かな

清水桂子

未完成の模型の船や白木槿

高橋満耶子

会釈して二言三言木槿垣

下川光子

出勤の主見送る花木槿

武田重子

無為の日や卒然と咲く白木槿

霜多光代

静かなる木槿の花が窓のぞく

田中章嘉

表札ののこる空き家や白木槿

菅原卓郎

目印の木槿切られて道惑

仲田利子

今日の陽を包みて夕べ白木槿

菅原真理

凜として生きる姿勢や白木槿

南條さわゑ

応へなき面会の窓むくげ咲く

杉浦千祐

木槿咲く垣根の中の父と母

西浦千枝子

底紅や世の移ろひも夢の如

鈴木藻好

花木槿あつけらかんと笑ふ友

西幅公子

木槿垣より懐かしき「秋止符」よ

鈴木玲子

朝誉めて夕に落ちたる木槿かな

野口和子

故里は韓よ凜然花木槿

関谷多美子

雲梯を渡る夕風白木槿

野田静香

白木槿旧家の跡地に咲きはこる	畑宮栄子	寺までのひとりの牛歩花木槿	丸山マスマ
口遊ぶゴンドラの唄白木槿	原田秀子	清澄な朝の窓辺や花木槿	宮崎チアキ
今朝の道押し花となり白木槿	樋口元美	木槿咲く散ることのみの潔さ	持永喜夫
村ひとつ眠るダム湖や花木槿	檜鼻ことは	早世の娘の足さする白木槿	本橋稀香
花木槿吾と似た顔がハングルを	福田千春	木槿垣男独りの灯を点す	森川義子
白木槿小さき家に笑ひ満つ	保坂翔太	紅と白塀に顔出す木槿かな	森下美智枝
夕暮に灯らぬ屋敷白木槿	曲淵徹雄	底紅や粋な女将の夜会巻	森美枝子
底紅やひとそれぞれの幸を知る	正木萬蝶	笑みたたふ木槿の勢ひわれも欲し	山岸久美子
白木槿遺品に新の割烹着	町野広子	横顔で笑いましたか白木槿	山中いちい
行き逢へぬひとに残心花木槿	松井由紀子	落陽と木槿の落花世は閑か	湯浅 和
虫喰ひの木槿侘びしや裏の窓	松宮保人	平穩に一日終へたり白木槿	横山君夫
讚美歌の流れし病棟木槿咲く	松本光子	ハルモニの皺のいとほし白木槿	横山札子

告白も走馬灯なり花木権

吉川拓真

惜しむらくはたつた一日の木権かな

綿貫ひさの

山紫集作品評 網野月を

花木権 蕾のごとく落花せり 後記朝香

「花木権」の景を的確に捉えている。よく観察した賜物であろう。また中七の「蕾のごとく」の含意の奥深さに思いをする時、「花木権」に籠めようとした作者の意図が一層、複層的な意味合いを孕んでいることに気づかされるのである。「蕾のごとく」とは未だに咲ききらないで、つまり開ききらないでという意味に筆者は解釈したのであるが、蕾が落花する量感や質感とも解釈できるであろう。咲ききらないうちに落花するとすれば、「花木権」の儚さに直結するであろう。量感、質感が蕾のようだということならば、木権の花の落花する速度や地表に到達する時の様態が想像される。

木権の白棋士一瞬の蒼白 綿引まりこ

短い花の命を棋士の一瞬の顔色に匹敵させた取り合わせである。「木権の白」色の花は真白と言って良いだろう。気高さを表出する一方で、怖さをも感じる白さである。作者はそこ

までの白さを棋士の蒼白となった顔色に見て取ったのである。将に「一瞬」を見逃さなかったと言える。筆者は先般のタイトル戦で九分九厘勝利をおさめたかに見えた棋士のことを思い出す。駒から指先を離れた、その瞬間に棋士自らもその落手に気づいたのである。白木権のイメージに新しい領域を広めている。

底紅やお披露目の日のおちよぼ口 日高道を

中七座五の句意から舞妓さんの景だろうと想像した。「底紅」の花芯のところの少しだけ見える紅色と舞妓さんの口紅の差し様が見事に合致して、補完し合っている。作者は「底紅」を見たその時に、記憶の中の何とも初々しいばかりの「おちよぼ口」を想起したのである。景ばかりではない。その際の意識や感情が思い起こされているのである。上五の切れ字「……や」の効用が大きく働いている。

日記には暫し木権の花の数 飯塚智恵子

毎日の日課として、木権の花の数を数えて書きとめているのである。大木ならばそうはいかないのだが、然程大きくない木柄なのである。楽しみでもあり、一度始めた日課が辞められなくなってしまうてる風でもある。「暫し」はほんの短い時間で、今日だけ、の意味に解釈できる余地がある。がやはり数日間木権の花を楽しんでいる作者を想像する。

秩父連山見ゆる小径の夕木槿 野村美子

秩父連山が夕日を背負って、影絵のようにくつきりと浮かび上がってきた景が目につかぶ。作者のご自宅からだと言山が入日の右手に連なっているように見えるのであろうか。「小径」とだけあるので、何処からの景なのかは句中に情報はないが、実景なのであろう。「秩父連山」「夕木槿」と作者の揃った景は、想像の世界ではないだろう。

底紅や開きしままの三面鏡 森 和子

上五の季語「底紅」は、木槿の傍題であるのだが、その季語の「紅」と言う文字面から、どうしても女性の属性や女性の身の回りの事物を連想させることがある。その連想から掲句も「三面鏡」のアイテムが作句の切っ掛けになったのであろうと推測した。中七の「……まま」から、時間の留まった「三面鏡」と、早回したように時間を過ごす「底紅」との対比が句に奥行きを添えている。

山の端に夕陽輝き木槿散る 山下ユリ子

中七の後に時間の経過があるようだ。「輝き」は連用形であるから「散る」に連繫するようにも解釈できるのだが、主語が転換しているので、この連用形は切れを作り出すための連用形であろうと思われる。技巧派の句作りである。一日花と言われる「木槿」だが、実際には二日から三日間咲く個体が多い

ようである。

白木槿角のパン屋に忌中の字 石田慶子

描写しようとする景の発想が実に奇抜である。奇抜とはもちろん良い意味であるが、発想の飛躍というか、新味というか、この作者はこのような世間の見方をする方なのであろう。普通人には太刀打ちできない感性の個性がある。掲句の句意はシュールだが、食パンの白さと「白木槿」が共鳴していて、構成も的確である。

古びたる母校励ます花槿 丸屋詠子

校庭にある木槿が花をつけている景である。「古び」ているのは歴史があることを物語っているのだが、威厳があるというよりも、「励ます」の措辞から経年したことへの意味合いが大きいように読める。花の命に比した「古びたる」が句意を深くしている。

白木槿思はぬ言葉「あんた誰」 元田亮一

言葉をかけた主体はいつい誰であろうか。その想像は読者に任されている。恋人関係ならあまりにも冷たいし、夫婦関係なら認知症を惹起させる。他人同士なら詩にならない。誰だか熟知している筈の主体の言として読むからこそ其処に深い意味が想像されるのである。もしかしたら「白木槿」との対話かも知れない。

水明の記事掲載他誌より転載

角川『俳句』十二月号

特別企画全国結社マップ南関東

水明

すいめい

主宰 山本鬼之介

拠点／埼玉県さいたま市

最年長・九十八歳／最年少・三十四歳

○信条

初代・長谷川かな女の遺志を引き継ぎ、各自が自己の個性を活かした俳句を詠むことをモットーにしている。有季・旧仮名遣いを基本とするが、作者の意思を尊重し、句の内容によつては口語体俳句も可である。

○句会の月例数・場所

水明例会七回と各地句会四十回。主宰指導句会は十回。さいたま市浦和区が主で埼玉県内、東京、関西各地。

○どういう人に向いているか

年齢・経験を問わず、自分の能力に応じた俳句が楽しめる。「初めての俳句教室」「水明塾」を実施。初心者専門句会が七つ。通信添削指導、ネット句会あり。

○主宰・同人の句

マネキンを目白へ運び冬霞
花びらは蕊を抱きしめ花に雨
春愁や金槐集に恋の歌

山本鬼之介

網野月を

大村節代

年会費・一二〇〇〇円(月刊)

『俳壇』

十二月号

現代俳句の窓

曲淵徹雄

〔水明〕

長十郎

生きてゐる手押しポンプや秋浅し

凝らす目に揺るる梵鐘秋めきぬ

葛の花日の落ちかかる大河原

爺婆と棲みし一つ家長十郎

野分あと空を見上ぐる亀の首

燕去り軒の淋しき漁師町

ストップ 片仮名の乱用

主宰 山本 鬼之介

昨年から、水明集と季音の投句の中に、私が不適合と判断する片仮名書きの入った作品が多く見られるようになりました。動物・花・樹木・野菜などの名称を片仮名書きにした作品です。「人間」を「ニンゲン」と書いた作品もありました。このような俳句を目にして、片仮名書きされた理由が全く理解出来ず大いに悩みました。

年頭にあたり、今年からは不適合な片仮名書きを避けていただきたく会員の皆様にお願ひする次第です。

片仮名書きに対する私の概念は、左記の通りです。

- ① 外来語
- ② 外国人の名前
- ③ 外国の国名や地名
- ④ 外国名の動植物の名称

⑤ 生物分類上の「科」に付ける名称

⑥ その他一般的に片仮名書きが妥当と思われるもの

街の中で目にする片仮名表記や新聞・雑誌・各種の書物、そして、特にインターネットの影響が皆さんの俳句の片仮名書きの乱用に作用しているように感じていますが、文学である俳句のことを大切に思ってもらい、片仮名・平仮名・漢字を的確に使いこなし、皆さんの個性を活かした俳句作品を生み出していただくようお願いいたします。

水明俳句会のモットーは、

「俳句は感性の詩であるから、各自が自己の個性を活かした俳句を詠む」
です。

はじめての俳句教室 十周年記念懇親会が 開催されました

青木鶴城



好天の十一月三十日、大宮駅東口より徒歩十五分の結婚式場、ザロイヤルダイナスティー大宮に於いて「初めての俳句教室」の開講十周年を祝う懇親会が開催され、水明在籍の別所沼の俳句教室出身者十七名と講師及び指導関係スタッフ十三名の合計三十名が出席し、豪華なランチとお酒で大い

る盛り上がりを実感しました。

◇ ◇ ◇ ◇
別所沼の「はじめての俳句教室」は、さいたま市公園緑地協会が主催しており、さいたま市報に五センチメートル四角程度の小さな募集記事が掲載されます。初回は三日間の俳句講座だったようですが、二回目からは二日間の俳句講座となっています。なんと受講料が二日間で千円のみという格安な俳句学習の場故に人気があるようです。水明は講師の派遣という形で協力していますが、主催者との信頼関係は年々密になっており、毎年定例の講座として認められています。

第一回目から五回目までは山本鬼之介主宰（当時は副主宰で、普及推進部長を兼任）が講師を務められ、第六回目からは、網野月を講師による俳句教室が続いています。

教室第一日目は、俳句のいろはの講座で、俳句の歴史やその形式から季語までを学んだ後、季題による俳句二句の実作をして頂き、次の日に講師が添削を返します。

第二日目は、午前中に講師スタッフの付き添いのもと別所沼を吟行して二句を詠んで頂き、午後からの句会で俳句の鑑賞と合評の楽しさを味わって頂きます。

定員二十四名の俳句教室の受講者は、これまでの十年間で延べ二百二十名を超え、その内の七十余名が水明に入会をしています。高齢の理由や健康や家庭の事情で退会される方が増加の一途をたどっている現状において、俳句教室からの纏まった入会が退会の人数を補って余りあります。すなわち普

及推進の目的に於いて俳句教室の貢献度は多大なものです。

◇ ◇ ◇ ◇

さて、懇親会は最初に出席者全員の記念撮影から始まり、山本主宰より手探りで始めた俳句教室が十周年を迎えた事への感慨深い思いと、念願だった記念の懇親会が実現にこぎつけられた事への謝辞の挨拶、指導者を代表して境延昭氏より俳句教室の為の指導テキストを手作りしたことや、別所沼の公園事務所の前に建立されている長谷川かな女の句碑「曼殊沙華あつめて丘を浮かしけり」をどのように鑑賞したか等々の挨拶の後、網野月を氏の乾杯で酒宴、歓談となり、前菜、鮭のカルパッチョや鴨肉と料理も進む中、第一回目から第十回目までの各回の受講者の代表からコメントを頂きました。

第一代表の渋谷さいち氏、第二回の新曆文氏、第三回の清水桂子氏、第四回の加藤でん治氏、第五回の千坂平通氏、第六回の岡田宣子氏、第七回の小林京子氏、第八回の篠原さよ子氏、第九回の寺町知子氏、第十回の阿部貞代氏よりそれぞれ俳句教室での思い出や、実際に俳句を始めてからの苦労や感銘を受けた句の披露等々、突然のご挨拶をお願いされたにも関わらず立派な、はたまた堂堂としたお話に皆さんより大きな拍手が有りました。第一回から十回まで欠ける事なく一名以上が出席して頂いたのは本当に幸いなことでした。

会場は結婚式場でもあるので、とても綺麗なホールで、料理もまずまず。四人掛けの円卓には指導者と生徒が同席するように配置され、会話も弾んでいた様子でした。駅からは少



はじめての俳句教室
十周年記念懇親会会場風景
(於ザロイヤルダイナスティー大宮)

し遠い感じはありますが、とても素敵な会場でした。
最後に今後の末永い俳句教室の存続と水明の更なる発展及び列席者の健勝を祈念し、関東三本締めにて会が開きとなりました。

◇ ◇ ◇ ◇

お世話をして頂いた会場の担当者と、十五周年を迎えた時にも記念の懇親会をする旨の口約束をして会場を後にしました。心地よい程の天候は、大宮駅までの徒歩を楽しめるものにしてくれました。

次回の俳句教室からもどんな人たちが入会してくれるのか楽しみにしましょう。

水明例会

第一例会（浦和）

境延昭
木和子 報

ぼつねんと点す駐在肌寒し
肌寒や手機の箴の軋る音
張りばてに一種の気魄恵比寿講
肌寒し従姉独りの武家屋敷
金風にゆるる張子のペコの首
黄落の華燭形見の一張羅
日幽か石に張りつく秋の蛇

延昭
マスミ
亮一
徹平
卓郎
千祐
喜恵
——以上特選

京子
由紀子
和葉
喜恵
はるみ
徹平
マスミ

肌寒に爪先立つる下駄の音
引つ張つて夕日の映ゆる烏瓜
山頂より吹き下ろす風肌寒し
肌寒や自動扉の絵は南瓜
肌寒や金沢過る二つ川
二の腕を思はずさする肌寒し
爽やかや一張羅を着歌舞伎見に
肌寒し空に消えゆく鳥の声
意地張りの熱湯仲間末の秋
張外題ありし書開く温め酒
肌寒し子の衣借るれば丈長し
戸をくりて朝の日差し肌寒し

卓郎
稀香
チアキ
拓真
亮一
治子
順子
延昭
舍人
節代
千祐
和子

第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

七五三祝三代つなく紅き被布
還暦や夕日に光る木守柿
読めるもん！1・2・3・4七五三

いちい
ッ
竺仙

篁道の古りし家紋や七五三
木守や命の軽き星となる

みどり
鶴城

第三例会（東京）

五明
曲淵徹雄 昇 報

能面の深き眼の奥秋気澄む
膝の猫おろすに忍びなき夜寒
来し方を謎のをとことあて夜寒
落ちかかる棹を支ふる首領雁
一つ星夜寒の路地に煮物の香

康世
順子
萬蝶
星歩
——以上特選



あまびえの化粧穩やか神無月
船笛に応ふる船や夜寒し
観劇の後の昂り十三夜
宵寒に嗚のある幸とせむ
夜寒さや根をつめたる針仕事
終電の夜寒に響く発車ベル
聴きとめし夜寒の街の風の音
夜寒さや内風呂に抱く膝小僧
草は実に文字の掠れし開拓碑

萬蝶 順子 理恵 千祐 雅夫 星歩 康世 徹雄 昇

第四例会 (浦和)

境延昭 石井喜恵 報

剃り立ての小僧の頭模檀の実
行く秋や拔身をさらす古刀展
模檀の実仏頂面を売り物に
老木に勁き背なある秋の果
行く秋や勿来に払ふ歌碑の塵
行く秋や人懐つくくなる老婦人
不揃ひが競ふ香りや花梨の実
翳りゆく窓辺に匂ふ模檀の実
行く秋の峠の茶屋の隅にをり
行く秋や洪鐘わたる嵯峨野路
行く秋や竜飛岬の風唸る
さ庭辺の雨滴に光る模檀の実
秋の末「昂」の主去りにけり
ゆるやかな古墳の起伏秋の果

延昭 寛治 由紀子 昇 恵子 曆文 喜恵 以上特選 曆文 翔太 瑠子 恵子

第五例会 (浦和)

梅澤佐江 河野はるみ 報

黒土に豊作願ひ冬耕す
小春日や和服を袴に異国人
小春日や恋歌ばかり口をつく
瀬戸小春小舟の水脈の輝けり
冬耕や暮色に染まりゆく翁
祝事や和服の裾に小春風
白雲の浮かぶ池塘に小春風
生まれ来る子の名あれこれ小六月
トラクターの上で昼飯冬田打
小春日や「花」奴を口遊む
「ちよつとそこまで」小春日のペーカ
富士晴れて箱根も小春遊覧船
母の忌の四方山話小春の日
バエリアの午餐華やく小春かな

宣子 千祐 義子 佐江 以上特選 玲子 千祐 美佐尾 宣子 水尾 義子 佐江

若松例会 (京橋)

正木萬蝶 石田慶子 報

冷まじや棲み分けの無き人けもの
山肌あらはメガソーラーの冷まじき
冷まじや銀穂貫く一本道
冷まじや障子の穴を猫と風
毒茸を蹴りて樹海の中へ入る
冷まじや影なきひとと添ひ遂ぐる

以上特選 萬蝶 鶴城

関西例会 (大阪)

森本早苗 報

冷まじや曇天をゆく群れ鴉
冷まじや吊られて納屋の朽ち田舟
冷まじや曇天をゆく群れ鴉
意を決し火中の栗を濁り酒
冷まじやサツシの軋む朝の窓
一乗寺下り松こそ冷まじや

以上特選 千津子 玲子

晚鐘に身動きもせず浮寝鳥
近松忌よと囃みたる紅返し
文左衛門こころより船出蜜柑もぐ
内濠にあそぶ水鳥チエスのごと
銃声の無き国の沼浮寝鳥

洋子
ゆら女
道子
和子
早苗

もみづるや六甲の峰峰晴れわたり

以上特選
玲子

野仏に無心に戯るる冬芒

千津子

水鳥と流れゆくかに中之島

ゆら女

晚鐘が合図のやうに時雨くる

和子

浮寝鳥夕さざなみに乗りそるふ

道子

小春日や産土の杜太鼓鳴る

千枝子

白壁の一棟目立つ柿の里

千世子

秋の蘭墨絵の滝をきはだつる

満耶子

冬満月橋杭岩を幻想に

さわゑ

水鳥や古巢恋しと舞ひ戻る

早苗

刈り跡に取り残されし鴨の群れ

早苗

霜月の関西炎ゆる第七戦

昔話あれこれ 34

左大臣は年も若く、学才には殊の外劣っていた。

右大臣に対する帝の信頼は格別なものであった。左大臣は不安であった。前世からの因縁であろうか。右大臣のために

不幸な出来事が生じ、昌泰四年(902年)正月二十五日大宰権師となつて流罪になった。

(*時平は、道真がその娘婿の齊世親王・「宇多天皇皇子」を東宮に立てようとしてしていると讒言をして道真を陥れることに成功した。

新潮日本古典集成「天鏡」頭注より)

にほひおこせよ梅の花

道真には大勢の子達がいたがそれぞれ別々な方面に配流された。幼い子供達さえ同行を許されなかつた。

都を離れる時、道真の詠んだ歌

東風吹かばにほひおこせよ梅の花

主無しとて春なわすれそ

(大意) やがて春になつて東風が吹く頃になったら、それに託してお前の花の香りを寄越しておくれ。主が居なくなつても、春を忘れるでないぞ)

また、宇多天皇には次の歌を奉つた。成果

流れゆく我は水屑となり果てぬ

君柵となりて留めよ

(大意) 配所に流されてゆく私は、流れの中の水屑となつてしまいました。どうか君よ。柵となつて私を留めて下さい)

一栄一落これ春秋

播磨の国、明石の駅(うまや)に到着した時、駅の長(おさ)が大層驚き、悲しんでいる様子を見て作つた漢詩は、とても悲しいものであつた。

駅長莫驚時更改

一栄一落是春秋

駅長驚く莫れ。時の変り改まること一たびは栄え一たびは落つる、これ春秋(大意) 駅長よ。そんなに驚くことはないぞ。時勢が変わり、大臣であつた私が、配流の身となつて筑紫に落ちて行くことを。

春には美しい花が咲き、秋には落葉するの、自然の姿である。栄枯盛衰は人の世のことわりだから。

(つづく) 丸山マスキ

各地句会



めだか句会 (浦和)

蜜柑色一個もあれば暖かき
 柚味噌やご飯大盛三杯目
 冬晴や物干す音の心地よく
 しばらくは蜜柑のつづく車窓かな
 剥き方に君占ひし蜜柑かな
 冬晴や焼きいもの声遠く近く
 大厄に小さき幸あり神楽月
 大小の手編み手袋天日干し
 冬晴や乳母車押す三歳児
 ネットから覗く蜜柑を連れ帰る

若枝句会 (浦和)

蕎麦すすするホーム静けき初時雨
 初しぐれ木桶にそだつ醬かな
 小春日に緩り旅立ち鳥の群
 掃き寄する今朝の葉重し初時雨

智子 敦子 久夫 六弦 灯留 比早子 月を 鶴城 はるみ 三茅

珈琲の焙煎待つや初時雨
 湯豆腐やうんちくの父したり顔
 小春日の釣りに来るひと帰るひと
 りそな俳句会 (浦和)

水攻めに耐へし城跡水雨降る
 代々の古着の染みも七五三
 手挙げても引き摺る吾子の千歳飴
 ネオン消え街は無色に水雨降る
 水雨降り麓の村を秘境とす
 止まり木に暖を求める水雨かな
 狢犬も目を細めたり七五三
 空見上げ心が折るる水雨かな
 しんしんと手足蝕む夜の水雨

水明鬼石句会 (鬼石)

絵心をくすぐる形ラフランス
 麦の芽のひと雨ごとのびる朝
 風よ吹け陽はさんさんと吊るし柿
 芽吹句会 (浦和)
 高層のビルは墓標ぞ冬夕焼
 冬夕焼浴びて駆け抜く天皇賞
 墨染の家並の彼方冬夕焼
 茅葺きの残る山里寒夕焼
 冬夕焼四囲は影絵の街景色

貞代 みどり 徹雄
 マスミ 道 久美子 建治郎 寛治 歴文 京子 雅夫 和子 ナヲ子 聡子 修 富子 チアキ 千重子 久美子

秩父嶺を真つ赤に染むる冬夕焼
 水鳥の堀の水位を追ふ日かけ
 小春日や人形焼に片鱗
 野菊の会 (与野)

鏡面の水面光りに冬立つ日
 書き順の今昔おもふ文化の日
 コーヒーのほどよき苦味冬立つ日
 冬うらら大き小さきと柑橘類
 光が丘俳句教室 (東京)

夕映えの十一月の櫻かな
 二親に四人の祖父母七五三
 櫻蔭句会 (浦和)
 そぞろ寒里の裏口心張り棒
 吊橋は定員五名合紅葉
 吊橋の底は奈落かそぞろ寒
 鉄橋を渡る汽笛に谷紅葉
 秋夕焼荒川橋の河川敷
 行く秋や「あやとりばし」の朱のうねり
 橋脚の淀みに遊べ舟紅葉
 赤き橋潜り江ノ電秋の古寺
 秋月とともに渡るや瀬戸の橋
 釜上げの蛸売る女そぞろ寒

玲子 ひろこ 道 美代子 和子 清子 光子 是 理 恵 茂子 美智枝 公子 千恵 美子 由紀子 行雄 多美子 久美子 幸代

離の会 (浦和)

今宵限りと抱き合ふ二人神の留守
冬に入る窓なき納屋に人の声
庭下駄の形のまに今朝の霜
綿虫とぶ叱られし子の田圃道
綿虫やひとつ話に嘘まこと
綿虫に思慕の重さや人恋し

チアキ
燈女
輝翠
公子
喜恵
佐江

名はつけずいづれ手放す飼兎
初冬や江戸のめ組の竜吐水
初冬や光芒美しき日本海
道迷ひ開きし地図に初時雨
風花の散り込む谷中築地塀
地下足袋のこはぜ光るや小六月
あゆみの会 (浦和)

徹雄
翔太
順子
利子
まり子
卓郎

煮凝の色艶やかに蔵座敷
稜線が幾重にも見え山眠る
国盗りの城を戴き山眠る
煮凝や深海の底ふと思ふ
煮凝や夜勤の足が食らひつく
世界地図古りし教室山眠る
いくつもの魂を抱き山眠る
双岳のうなづき合ひて眠るかな
煮凝に蘊蓄多き客集ふ

マスマ
水尾
昇
恵子
史代
広子
和子
和葉
節代

青葉の会 (浦和)

独り居の続く毎日白山茶花
山茶花の零るるままに古寺の道
つつがなく過ぎし一年山茶花掃く
山茶花の垣根華やか光帯び
こぼれたる山茶花咲かす路面かな
山茶花や垣根越しなる日の匂ひ
山茶花の散れども子供のみ顔
筑波山から関東俯瞰神渡し
牛膝胸つき出して帰る家

美紗子
真理
美智枝
公子
美子
啓子
洋子
和子
輝翠

湯豆腐のぐらりと揺らぐ艶話
初霜の沼田一面あみだ籤
初霜や赤錆匂ふ歩道橋
湯豆腐やかつて横座に父の笑み
初霜や軒に干さるる草木染
湯豆腐や今宵手酌の大吟醸
初霜や朝の景色を輝かす
ざざきサークル (浦和)

重子
藻好
啓子
俱子

神無月土産に貰ふ夫婦箸
水鳥やでんぐりがへりかくれんば
神無月仁王自慢の力瘤
浮寝鳥最終列車の一つ前
水鳥や映り込む山崩す水尾
軽トラに迷ひ猫乗る冬日影
控へめに打つ柏手や神無月
水鳥やたつた二人の縄電車
笹の葉のそぞろ流るる神無月
唐松の落葉時雨や軽井沢
神無月夕陽うけたる山も暮れ
マホメットもキリストもなき神無月

小麦
伸子
まりこ
夕峰
律子
さよ子
和子
珪子
風舎

りんどう俳句会 (浦和)

別れ路の初冬の陽差し地に零れ
初冬の百円バスに旅心地
早起きし革ジャン羽織る初冬かな
ラインダンスに生きる力を冬初め
往きたきは月の都よ兔抱く

寛治
君夫
弘夫
治子
風子

山眠る日本列島弓なりに
煮凝や少し反りたる落し蓋
珊瑚の会 (浦和)

かつ子
喜恵

神無月木木の身仕度始めたる
ベルボーイ荷を輕輕と小六月

月を
鶴城
京子

櫻の会 (浦和)

干すといふ魔法切干日和かな
風邪ひきの目眩の揺れか地震かすか
こんこん風邪の子みつけかくれんば
篤農の莫塵に切干門構へ
風邪めきてむすめとハモる嗽かな
切干のちりちりちむぢむ好天気
風邪気味的女子アナむしろ艶めきて

若狭水明会 (若狭)

秋深し鍋の具下げて友来たる
栗おこは卒寿の爺の目尻かな
栗御飯昔話はこのへんで
茶柱のすとんと立てり深む秋
農道の深き轍や秋深し
母無くて遠のく実家秋深し
深秋やタイムカプセル開く母校
迷ふだけ迷へと地蔵秋深し
無住寺と無人の駅舎秋深む

鶴川山百合句会 (町田)

喇叭吹く少年土手に秋の暮
幾年を生きねばならぬ秋の暮
門に佇つ母に手を振る秋の暮
秋の暮小さく低く子守歌

秋の暮立てかけたままある梯子
子持鮎じつくり炊かれ醬油色
姑に似て来し所作や秋の暮
塾へ行く子らかたまつて秋の暮
鮎落ちて人の世何も変はらざる
面会の母の目笑ふ秋うらら
芙蓉句会 (浦和)
時雨るるや揃ひのリユック塾帰り
時雨抜け時雨に入る札所道
まだ青き袖子を濡らして初時雨
病む妻に添ふ夫の黙夕時雨
和歌山水明句会 (和歌山)
山鳩のこゑ奔放に神の留守
糶田に落穂拾ひの番鳩
母校への一本道や秋ざくら
能楽をスマホ動画に桜紅葉
尻餅の可愛い笑くば大根引
熟年や童謡歌ひ秋麗
早朝よりドクターヘリや鴨騒ぐ
鈴生りの柿守となる捨案山子

雄二郎
月を
史代
広子
蟹の会 (浦和)
朝市に名入りの野菜神無月
小春日や水面近くに池の鯉

由美子
千春
萬蝶
理恵
美千子
玲子
道子
税子
美子
和子
道子
千枝子
千世子
満耶子
さわゑ
洋子
廸代
神無月上野の森にヴィーナス来
雲水の早足を巻く空つ風
雲空荒れて泡立つ能登の海
万神出雲參集神在月
冬麗や水神祀る五色幡
待ち人の顔の見えたり棄降る
みざるるや漬物仕込む桶並ぶ
野ばらの会 (浦和)
女子会に予約の焼き芋抱へ来る
立冬や農婦伸びする西明り
有明の空の清しさ今朝の冬
当世風焼芋売りの名調子
犬連れて石焼芋のほひ追ふ
山茶花 (浦和)
白壁に暫時の日脚冬隣
冬となりあたり一面淋しくて
猫自在在菊生垣を潜りぬけ
ミモザの会 (横浜)
短日の朝から煮込む肉料理
暮早しオムニバスめく山手線
短日のポストにささる葡葡の実
ピアノ弾く黒光りして葡葡の実
地下鉄を出でて地上の暮早し
冷まじや瓦礫に埋れぬひぐるみ

風舎
ひさの

元美
礼子
英子
しるく
月を
鶴城
宣子
夏江
茂子
栄子
秀子
みき子
マスマ
美江子
綾子
亜弥子
萬蝶
栄子
玲子
千春

水明澤つくし句会 (大阪)

逆剥けの母似の指や秋の暮
しぐるるや然ても明るき一休寺
帰路急ぐ浮寝の鳥も目の端に
まなこからとろけてゆきぬ日向ぼこ

皐月の会 (浦和)

立冬の硯に落つる水の音
磯宿の雨戸の閉ざし冬に入る
ライブ終へ光る舗道や冬に入る
遠山のいただき白し今朝の冬
全身を耳に講義を体育の日
全円になりて拍手のおかめ市
踏む度に虚しと忘れ朴落葉
縦糸と紡ぐ横糸神の旅
限りある命を思ふ朴落葉
車窓から赤城浅間や今朝の冬

若鮎句会 (浦和)

着ぶくれの人が人呼ぶ中華街
立冬やのれんの奥は湯気の中
一人めし干物を焼きて冬に入る
七味ふる牛筋煮込み冬来る
立冬のかをりと思ふ今朝の白湯
一瞬に廢墟の街へ冬の星

智恵子 人美 洋子 ゆら女
山菜 更穂 光代 珪子 順子 紀子 静香
美佐尾 曆文 さいち

ボール追ふ子ら澗瀬と冬に入る
立冬のピリケン二軒目の外に
十一月街は早極彩色

冬ざれの街路の灯火絢爛と
今朝の冬真白き富士に見送られ
落日の茜空行く寒鳥
行列のできるうどん屋街時雨

冬雲雀何を矜持の街宣車
冷やかしも夜寒の街に絆されし

神戸大池句会 (神戸)

そぞろ寒ギブスの足のままならず
行楽日溪流滑る落葉舟
霜月の関西炎ゆる第七戦

円卓の会 (浦和)

付け文に添へたる和歌や都鳥
電飾の花の咲きたる枯木立
絆のごときトライアングル冬星座

割烹着つけ紅引く先に都鳥
刻むほど銀杏散るらむメトロノーム

黄落や古刹の庭の六地藏
凧や都会の中の路地の底

夜会巻の解くるままに冬の霧
隙間風止みて気になる静寂かな

大鳥居被布へ舞ひ降る木の葉かな

拓真 順子 香音子 道郎 月城 鶴城 喜夫
拓真 玲子 千津子 早苗 翔太 静香 輝翠 亮一 道修 京子 月城 鶴城

コクーンシティカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)

鍼灸院の引戸の鈴や小春の日
小春日や街へたばこで農談義
屋台酒夜寒に点る中洲の灯
図書室の気だるき午後や小春の日
飛蚊症の眼を弄ぶ雪螢

小梅の会 (浦和)

まだ見ぬ人生想ふ秋の一日
板塀の残る裏道秋深し

今年米越後の友の笑顔かな
落花生今日も鳴る鳴る鍋の音

底紅や母の幸の字貰ひ受け

たかな俳句会 (川口)

闇走る車に当たる木の葉かな
色かへぬ木の葉をにらみ風のなか

路地裏に木の葉舞ひ込む日暮れかな
相客は舞ひ込む木の葉露天の湯

計らずも知恵の輪抜けて冬ぬくし
おめかしへ舞ひ降る木の葉大鳥居

遥かなる海のふるさと冬うらら
木の葉散り風とコラボや円舞曲

延昭 俱子 健司 美枝子 昇
恵子 隆文 隆然 道
謙一 のり子 福美 小麦 義子 鶴城 水尾 静香

柿の木塾 (浦和)

迎賓館の金の紋章冬襖
襖絵の小雀一羽雲隠れ

丁寧に日常を生き冬紅葉

ここからは神の領域冬紅葉

去る人を追はず忘れず冬紅葉

家家に生活の音や冬襖

宿坊や飾る襖絵色褪せて

開け閉めの襖に忿怒の龍走る

新樹の会 (浦和)

文弱は長寿の秘訣海鼠囃む

校訓に礼節の二字冬紅葉

時の鐘聞こゆる里の冬紅葉

公園の朱あり黄ありの冬もみぢ

おでん酒弱気の虫をこれきりに

冬紅葉暮六つ告ぐる鐘の音

境内の砂利の響きや冬紅葉

若楠句会 (浦和)

新しきセーター鏡に鎖きぬ

湯豆腐に二度鎖ける夕餉かな

間引菜を一汁にせり初時雨

青年の踏みし枯葉の後を行く

天空に彩なすものは枯葉のみ

かつ子

和葉

恵子

節代

水昇

章尾

和嘉

子

風子

平通

清吉

徹修

道雄

鶴城

鶴城

真由美

直子

葉子

京子

風舎

変はりゆく日の本の四季初時雨
初時雨レコードの針そつと置く

水明熊谷句会 (熊谷)

一枚の障子の隔つ異界かな

カウベルをつけてもみたき熊の首

大利の開け閉め重き大障子

柏手に簪揺るる小春かな

猫間障子に映ゆる不夜城屋形船

手品師の放つ白鳩小春空

両の手に包む日溜り柿落葉

里に下り攻防の日日熊と人

俳句の手ほどき (山根)

鉄匂ふ永代橋に冬の月

冬構大掛りなる永平寺

永字八法小春の海へ筆おろす

山寺の急なきぎはし柿落葉

永田町寒鴉うろつく一丁目

山姥の褥とならむ柿落葉

高山の朴散る里の玄米パン

踏み歩く音かろやかに柿落葉

民話聞く子を憫かす柿落葉

奥山の雄鹿眺むる柿落葉

永久に語り継ぐや一茶の記

旅一座葛籠に朴の欠け落葉
いたづらな風に遊ばれ柿落葉

宏鶴

治城

道子

秀子

燈子

栄子

徹平

卓郎

風子

茂子

延昭

佐江

水尾

義子

徹平

翔太

幸代

久美子

桂子

忠子

美子

卓郎

かつ子

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

- [指導者] 網野月を
- [作品] 5句 [受講料] 1,000円
- [方法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③84円切手を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付
- [送付先] 網野月を 電話 080-7580-0208
〒338-0012 さいたま市中央区大戸1-31-2

令和6年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。

新人登龍門の主旨をよく解されて多数のご応募をお待ちしています。

- 応募資格** 季音同人を除く同人・誌友
- 応募句** 未発表作品：15句(表題を付す)
水明集・句会報等「水明誌」及び外部に発表した作品は不可。
- 締切** 令和6年2月末日（発行所必着）
- 応募方法** 水明12月号に応募用紙添付

選考は、新珠賞選考委員と各地区委員の選考結果を基に、新珠賞選考委員会に於て受賞者を決定いたします。

尚、誌上には受賞者の作品のみを発表します。

新珠賞選考委員会委員（9名）

山本鬼之介	網野月を	大村節代
石山かつ子	石井喜恵	保坂翔太
青木鶴城	日高道を	曲淵徹雄

各地区委員（4名）

大橋 廸代	檜鼻ことは	永野史代
五明 昇		

新春俳句大会のご案内

- [日 時] 令和6年2月1日(木) 12時 受付
12時30分 投句締切
- [会 場] 浦和コミュニティーセンター第14集会室
(JR浦和駅東口前パルコ10階)
- [投 句] 「春待つ」「待春」「春を待つ」可
「寒卵」「寒たまご」可、「寒玉子」不可
各1句
- [参加費] 1,000円
- [申 込] 1月9日(火)から受付開始。25日(木)までに会費と申込書(1月号に添付)を添えて発行所総務部宛にお願いいたします。

年当初の新春俳句大会です。日時をご確認の上、奮ってご参加ください。
※当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。

事業部

水明忌のご案内

- [日 時] 令和6年2月29日(木) 12時 受付
12時30分 投句締切
- [会 場] 浦和コミュニティーセンター第13集会室
(JR浦和駅東口前パルコ10階)
- [参加費] 1,000円

※ 「水明忌」は、長谷川秋子(第2代主宰)、星野紗一(第3代主宰)、星野光二(第4代主宰)の忌を修する日です。日時をご確認の上、奮ってご参加ください。

※ 当日は昼食の用意はありません。飲み物は各自でご持参ください。兼題などの詳細は2月号に発表いたします。

事業部

令和6年度「例会・句会指導者 および幹事の会」開催のお知らせ

昨年度より指導者および幹事の会を再開し、水明俳句会の運営等にご理解が深まったことを実感しております。

令和6年におきましても水明俳句会の組織としての在り様を皆様と再考し、水明俳句会の更なる発展のための施策などの討議もいたします。

万障お繰り合わせの上、ご出席ください。

記

- ◆日 時 令和6年2月1日(木) 10:00 (09:30 受付)
約1時間半を予定
- ◆会 場 浦和コミュニティーセンター 10F第14集会室
(浦和駅東口前パルコ10階)
- ◆議案など
 - ・令和6年度の年間事業計画について
 - ・各例会、各句会の現状報告、および情報交換
 - ・例会、句会の会場・時間などの変更事項の報告について
 - ・水明集および他の応募句等の投句方法について
 - ・その他

※欠席の場合は、総務部宛に連絡をお願いします。なお代理の出席をお立てください。

※当日は午後から「新春俳句大会」が開催されます。併せてご出席ください。

令和6年1月

水明主宰 山本鬼之介
幹事長 網野 月を

風 声

○俳句四季十一月号——「季語を詠む」欄

宿木を育成中の屋敷林

鬼之介

○現代俳句十一月号——「現代俳句の風」欄

秋晴を二階の窓にゐる兄弟

菊池ひろこ

望潮に舟を出したり鰯雲

梅澤輝翠

百日紅武人埴輪のまろき肩

大塚茂子

ふと胸をよぎる余生よ十三夜

越田栄子

巻戻すテープの如く蛇穴へ

本橋稀香

○天塚（宮谷昌代主宰）十一月号——「珠玉一句」欄

憧るるひとの夏帽深みどり

鬼之介

○くぢら（中尾公彦主宰）十一月号——「受贈俳誌美術館」欄

惜敗の顔すがすがし秋の昼

鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）十一月号——「受贈誌拝見」欄

去ぬる気配なき姑や夏の夕

鬼之介

○好日（高橋健文主宰）十一月号——「俳誌月評」欄

北村士守氏による「水明」7月号の鑑賞

主宰 山本鬼之介。昭和五年九月長谷川かな女が、現在の

さいたま市浦和区で創刊。季語を入れて自己の個性を活か

した俳句を詠む。

飛魚の海

主宰作品

短夜や仏和辞典を引く女

飛魚の最長不倒距離いかに

水明抄

主宰選

逃水を追うて八十路の青い鳥

女生徒の国歌独唱風光る

春風やワルツ踊るポリ袋

落し文渡してほしや紋黄蝶

春風や獣医学部に牛五頭

老い深き犬と少年春の夕

姿勢よき吾が学舎の松の芯

巫女の手に微かに触るる春祭

歌舞伎座へ後ろ姿の春日傘

陽炎や坂ゆく車夫の比目魚筋

季音抄

主宰選

天辺を玉座とおもふ沙羅の花

麦秋や指切りと言ふ淋しきもの

可不可なきゆるき人生蝸牛

麦秋の空より鴉もつれ落つ

砂塵舞ふ大内宿を鯉職

初鯉家紋の踊る大漁旗

清水桂子

越田栄子

新 曆文

梅澤輝翠

森下山菜

山岸久美子

丸屋詠子

元田亮一

反町 修

菅原卓郎

西山貴美子

波多野寿子

星野和葉

茂木和子

森本早苗

矢作水尾

白牡丹五重塔を遠巻きに

高島寛治

万緑に埋め尽くさるる鏡池

池田雅夫

夏がすみ魁夷の白馬現るや

梅澤佐江

薔薇垣や女ひとりの灯を点す

森川義子

「水明」創刊九十周年を記念し、若狭のかな女等の先師の句碑巡りツアーについて報告された。「ねばりひきでもあ
ろかと田向うの初蛙」（長谷川かな女）

○新月（松田碧霞主宰）十一月号——「受贈俳誌紹介」欄

憧るるひとの夏帽深みどり

鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）十一月・十二月号——「他誌拝見」

欄

自転車の巡查を招く稲の花

鬼之介

○太陽（吉原文音主宰）十一月号——「受贈誌御礼」欄

噴水や先づはウインナーワルツから

鬼之介

○暖響（江中真弓選者）十一月号——「俳誌散策」欄

松島洋一氏による「水明」八月号の鑑賞

「水明」は一九三〇年九月に長谷川かな女が現在のさいたま市で創刊。現在は主宰を山本鬼之介氏が引き継いでいる。

虫干や柳行李の使ひ道

鬼之介

また一つ勇気をくるる大夕焼

主宰山本鬼之介氏の「紹のひと」八句中の二句。

一句目。所蔵されている沢山の書籍を毎年虫干しされている。

また柳行李を作者の家では重宝に使われている。NHKの朝の連続ドラマでも主人公の植物標本が柳行李に大切に仕舞われている。二句目。夕暮れ時の西の空を真っ赤に染める夕焼け、そんな雄大な景色を眺めていると明日も頑張ろうという気持ちが湧いてくる。

同人作品
メール打つ「今守宮はりついています」 星野和葉

襟から風の便りの落し文 由良ゆら女

○菜の花（伊藤政美主宰）十一月号——「諸家近詠」欄

憧るるひとの夏帽深みどり 鬼之介

○波（山田貴世主宰）十一月号——「受贈誌展望」欄

千乃里子氏による「水明」七月号の鑑賞

昭和五年九月、長谷川かな女が現在のさいたま市浦和区で創刊。季語を入れて自己の個性を活かした俳句を詠む。

主宰山本鬼之介

主宰詠「飛魚の海」八句より

天鷲絨の袋を提げて青葉寺

山本鬼之介

飛魚の最長不倒距離いかに

「若狭の秘仏」七句より

里の田の水溢れ出し山若葉

島津初花

「お宮参り」七句より

乳ねだる児の甘泣きや額の花

山中みどり

「季音同人作品」主宰選より

天辺を玉座とおもふ沙羅の花

西山貴美子

砂塵舞ふ大内宿を鯉幟

森本早苗

白牡丹五重塔を遠巻きに

高島寛治

帯留に魔除けの般若絹裕

笹本啓子

「水明賞受賞ノオト」自選より

秋暁の水の硬さを手に掬ふ

横山君夫

蟪蛄の恋やお七は丙午

染谷風子

走り梅雨返しそびれし女傘

渋谷きいち

「水明集」主宰選より

逃水を追うて八十路の青い鳥

清水桂子

女生徒の国歌独唱風光る

越田栄子

昭和五年創刊という貴結社の歴史の重みを感じます。

また、「若狭句碑巡りツアー記」等を読むと、三十名の参加者があり、吟行の盛り上がりと充実が羨ましい限りです。

○ 餅（山本一步主宰）十一月号——「受贈誌の一句」欄

日盛りや保津川下りしぶき攻め

梅澤輝翠

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

— 令和五年十一月三十日現在 —

山本鬼之介	50	口	鈴木敦子	6	口
池田珪子	5	口	柚木治子	10	口
匿名	20	口	小倉倭子	20	口
保坂翔太	5	口	石田慶子	10	口
森和子	3	口			
			— 合計	129	口 —

誤植訂正

十二月号に誤植がありました。慎んでお詫び致します。

○ 六八頁下段

正 第二例会（東京）

山中みどり
青木鶴城 報

誤 第二例会（東京）

五明 昇報
曲淵 徹雄 報

水明の運営組織 (令和6年1月1日より)

主 宰 山本鬼之介

運営幹事長 網野月を

編集長 大村節代

常任運営幹事 網野月を 大村節代 石山かつ子 石井喜恵
日高道を 青木鶴城 保坂翔太 曲淵徹雄

監 事 [水明俳句会及び水明発展基金の会計監査]

山中みどり 新 暦文

運営幹事 大橋廸代 檜鼻ことは 町野広子 近藤徹平

各 部

総務部 [会計、会員に関する管理事務、各行事の受付事務、水明誌等の発送、発行所管理ほか庶務全般]

部長・日高道を 石井喜恵
菅原真理 岡田宣子

事業部 [水明俳句会各行事の企画・運営・実行、地方支部会員との連携、新規会員拡充の企画・運営・実行、ホームページの企画・運営・実行、俳句教室の企画・運営・実行、会員研修の企画・運営・実行、広報活動の企画・運営・実行、渉外関係用務、編集企画]

部長・網野月を 副部長・青木鶴城
保坂翔太 曲淵徹雄 河野はるみ
反町 修 小林京子 吉川拓真

編集部 [水明誌発行、全国大会資料の校正、水明誌の発送、その他編集関連用務]

部長 大村節代 石山かつ子 丸山マスミ
大塚茂子 野田静香

事務局 [常任運営幹事会の議案と議事録の作成]

局長 保坂翔太

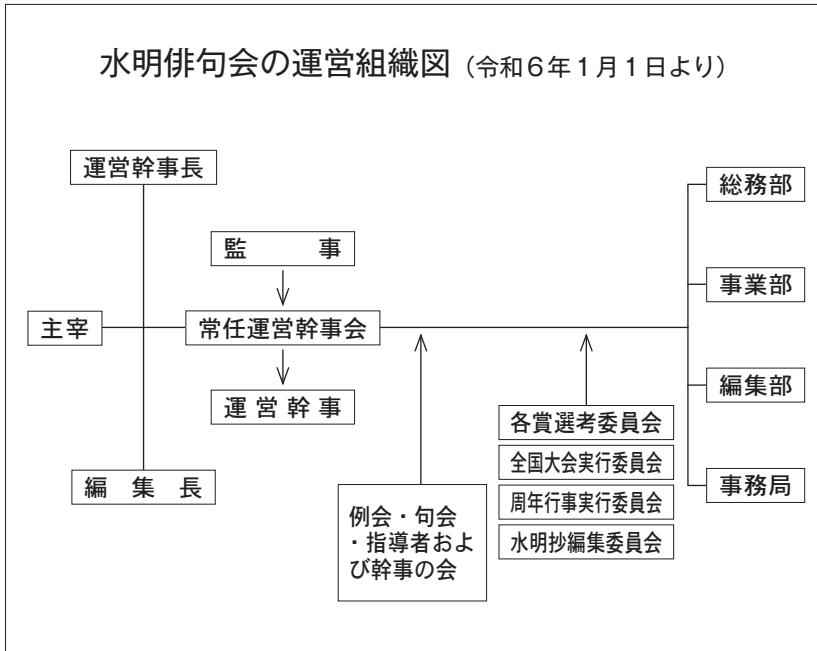
水明発展基金役員 (令和6年1月1日より)

会 長 山本鬼之介

幹 事 網野月を 大村節代 日高道を 石山かつ子
保坂翔太

監 事 山中みどり 新 暦文

水明俳句会の運営組織図（令和6年1月1日より）



水明俳句会各賞選考委員会（令和6年1月1日より）

水明賞				
主宰	網野月を 日高道を	大村節代 青木鶴城	石山かつ子 保坂翔太	石井喜恵 曲淵徹雄
季音賞				
主宰	網野月を	大村節代	石山かつ子	石井喜恵
かな女賞				
主宰	〔運営幹事長と編集長の同意を得る〕			
新珠賞				
主宰	網野月を 日高道を	大村節代 青木鶴城	石山かつ子 保坂翔太	石井喜恵 曲淵徹雄
各地区委員：大橋 廸代 檜鼻ことは 永野 史代 五明 昇				
鼓笛賞				
大村節代 〔主宰と運営幹事長の同意を得る〕				
山紫賞				
網野月を 〔主宰と編集長の同意を得る〕				

令和6年主要年間行事等予定表（案）

令和6年1月1日

行事名	日程	誌上案内	開催場所等	主担当	支援
新春俳句大会	2月1日 (木)	12月・1月号	浦和CC 第14集会室	事業部	
例会・句会 幹事会および 幹事の会	2月1日 (木)	12月・1月号	浦和CC 第14集会室	常任運営 幹事会	事業部
水明忌	2月29日 (木)	12月・1月・2 月号	浦和CC 第13集会室	事業部	
春の吟行会	3月30日 (土)	1月・2月・3 月号	別所沼会館	第1例会・ 第5例会	事業部
令和6年 全国大会	6月29日 (土)		さいたま 共済会館	実行委 員会	
水明夏行	7月29日・30 日・31日(案)		未定	事業部	
りんどう忌	9月30日 (案)		未定	事業部	
水明塾	10月29日 (案)		未定	事業部	

(注) 予定表の詳細未定については、月日・会場を変更することがあります。
本行事予定表にない日帰り吟行会などについては別途に対応する。
※「水明忌」は如月忌（秋子忌）・紗一忌、光二忌を統合した忌日。

令和6年主な兼題等応募句等募集について

募集行事名	誌上案内	応募用紙等	応募締切日	主幹	備考
新珠賞	11月・12月 ・1月号	12月号	2月29日	編集部	
令和6年 全国大会	3月・4月 ・5月号	3月・4月 ・5月号	5月8日	編集部	
水明競詠	6月・7月 ・8月号	7月・8月号	8月20日 (案)	編集部	

令和6年その他の行事について

行事名・募集行事	日時	会場	備考
現代俳句協会総会	3月16日(土)	上野東天紅	
埼玉県現代 俳句協会総会	3月20日(木)	さいたま 文学館	
現代俳句協会 第61回全国大会	11月16日(土)	ホテル 日航奈良	応募句は 7月末締切

水明例会および各地句会・教室のご案内

(令和6年1月1日)

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
第一例会	第1日曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 048-886-1860 小林京子 048-865-8158
第二例会	第3金曜 13時	本所ビッグシップ (東京・本所)	網野月を	山中みどり 03-3625-2435 青木鶴城 048-829-2776
第三例会	第1月曜 13時	京橋区民会館 (東京・京橋)	山本鬼之介	五明昇 048-858-7155 曲淵徹雄 048-864-4018
第四例会	第1木曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 048-683-0801 反町修 048-683-9623
第五例会	第3火曜 13時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 0480-22-4011 河野はるみ 090-9008-6422
若松例会	第1土曜 13時	京橋区民館 (東京・京橋)	山本鬼之介	正木萬蝶 045-491-8773 石田慶子 03-3853-2048
関西例会	第3日曜 13時	守口文化(セ) (大阪・守口)	大橋廻代	森本早苗 078-583-6225
水明鬼石句会	第3水曜 13時30分	藤岡市鬼石公民館 (群馬・鬼石)	野口和子	野口和子 0274-52-3418
水明小川 俳句に親しむ会	第1金曜 13時	大塚コミュニティ(セ) (埼玉・小川)	勉強会	越田栄子 048-525-5835
水明熊谷句会	第4火曜 13時	熊谷市立 コミュニティー(セ)	山本鬼之介	大塚茂子 048-596-1538 越田栄子 048-525-5835
雛の会	第2木曜 13時	水明発行所	石山かつ子	梅澤佐江 0480-22-4011
櫻蔭句会	第2水曜 9時30分	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	丸山マスマ	阿部幸代 048-974-1704
野菊の会	第2水曜 13時	下落合公民館 (さいたま・中央区)	椎野美代子	下川光子 048-857-2120
芽吹句会	第3金曜 13時30分	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	日高道を 090-2122-1223
柿の木塾	第3金曜 13時	水明発行所	勉強会	茂木和子 048-886-1860

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
歩の会	第1金曜 12時	水明発行所	勉強会	茂木和子 048-886-1860
りそな俳句会	第2火曜 18時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	星野和葉	池田雅夫 048-885-7276 日高道を 090-2122-1223
山茶花	第1水曜 10時	本太公民館 (さいたま・浦和区)	星野和葉	丸山マスミ 048-886-2447
櫟の会	第3水曜 13時	常盤公民館 (さいたま・浦和区)	星野和葉	柚木治子 048-831-6158
珊瑚の会	第4木曜 13時	水明発行所	研究会	大村節代 048-862-9658
芙蓉句会	第3金曜 9時30分	六辻公民館 (さいたま・南区)	山本鬼之介	山戸美子 048-741-1669
たかなな 俳句会	第3水曜 13時	芝二丁目集会所 (埼玉・川口)	山本鬼之介	野田静香 048-261-1858 青木鶴城 048-829-2776
きざき サークル	第3水曜 13時	木崎自治会館 (さいたま・浦和区)	五明昇	森和子 048-832-6565
花ごよみ句会	第3月曜 13時	さいたま市民活動 サポートセンター (パルコ・9F)	星野和葉	山下ユリ子 048-861-6685
野ばらの会	第2水曜 13時	さいたま市民活動 サポートセンター (パルコ・9F)	星野和葉	緒方みき子 048-881-8643
皐月の会	第2金曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	渋谷さいち 048-832-5319
青葉の会	第3月曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	梅澤輝翠 080-3357-5413
新樹の会	第4月曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	青木鶴城 048-829-2776
鶴川山百 合句会	第4火曜 13時	玉川学園コミセン (東京・町田)	町野広子	鈴木玲子 044-952-3643
ミモザの会	第2火曜 13時	アートフォーラム あざみ野(横浜)	勉強会	福田千春 045-901-6032
水明松本句会	第4週末	波多野寿子宅 (長野・松本)	波多野寿子	波多野寿子 0263-47-8937
若狭水明会	毎月20日	鳥羽公民館 (福井・若狭)	檜鼻ことは	鳥羽和風 0770-64-1211 鳥津初花 0770-64-1626
水明滯つ くし句会	第2土曜 13時	守口文化(セ) (大阪・守口)	由良ゆら女	由良ゆら女 06-6933-0689

句会名	日時	場所	指導・代表	幹事・連絡先 (自宅電話番号等)
和歌山水 明句会	第2木曜 13時	太田自治会館	大橋迪代	大橋迪代 073-471-5582 西浦千枝子 073-471-7929
神戸大池句会	第2火曜 13時	神戸市勤労会館 (神戸・中央区)	勉強会	田寺玲子 078-914-0341 森本早苗 078-583-6225
りんどう 俳句会	第2木曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10 F)	山本鬼之介	染谷風子 048-685-2963 菅原卓郎 090-1405-7813
俳句の手ほどき 岩槻教室	第1・3水曜 13時	岩槻駅東口 コミュニティ(セ)	山本鬼之介	石山かつ子 048-757-2484
コクーンシティ カルチャー 俳句教室	第2・4金曜 13時30分	コクーンシティ カルチャー (さいたま新都心)	境延昭	五明昇 048-858-7155
あゆみの会	第2・4木曜 13時	下与野 コミュニティ(セ)	境延昭	鈴木藻好 048-825-0158
蛸蚪の会	第3月曜 13時	下落合 コミュニティ(セ)	網野月を	岡田宣子 048-825-6502 青木鶴城 048-829-2776
円卓の会	第3土曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10 F)	網野月を	青木鶴城 048-829-2776
繭の会	第1月曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・11 F)	網野月を	小林京子 048-865-8158 青木鶴城 048-829-2776
若鮎句会	第2土曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・12 F)	網野月を	持永喜夫 048-925-7605 青木鶴城 048-829-2776
めだか句会	第4土曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・13 F)	網野月を	小田三茅 090-9687-1227 青木鶴城 048-829-2776
若枝句会	第4木曜 13時	浦和仲町公民館	保坂翔太	阿部貞代 090-6186-5123 高山みどり 090-7638-4758
若楠句会	第4火曜 13時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10 F)	青木鶴城	門真宏治 048-686-2600
小梅の会	第4木曜 19時	不 定	日高道を	播磨進 090-1251-6134

あけまして

おめでと

ございます

総務部

謹賀新年

いつも総務部の仕事に対しご理解をいただき有難うございます。

総務部では、一昨年の十一月から土日祝日、行事の時以外は発行所を毎日開所しています。

総務部の仕事は皆さんの投句された郵便物の処理、誌代等のお金の受入れ、会員情報の整理、水明誌の発送、発行所の庶務的事項等水明俳句会の活動がスムーズに行くように、そして会員の皆さまが楽しく俳句の活動をしていただくよう、微力ながら力を合わせて頑張っています。

コロナ禍も少し落ち着き、お出掛けやすい状況になってきましたので、皆さまと水明の様々なイベントでお会いしたいと思います。どうぞ今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

(日高道)

事業部

今年が水明俳句会及び皆さまに良い年でありますように。

昨年は、コロナが下火になり、予定された行事はすべて行うことができました。

一月の新春俳句大会、二月の水明忌。四月には春の吟行会が調神社、玉蔵院及び別所沼公園等を各自下見をしてコミュニティセンターで行ないました。五月には六年ぶりに若狭句碑巡りツアーが挙行され、鳥羽谷俳句会の皆さまとの絆が深められました。七月には恒例の水明夏行が三日間にわたり開かれ、名句が生まれました。

夏深し扉の重き無言館 昇
深海に眠る大和よ八月来 風子
九月にはりんどう忌、十月には水明塾。その全句講評講座の講師の他に五人のパネラーが句評に参加したのは新しい試みでした。

今年も楽しく、充実した行事が計画されており。皆さまの参加をお待ちしております。

(反町 修)

事務局

井口俊晴事務局長が脊柱管狭窄症のため辞任したことにより二〇二三年六月一日付で事務局長(兼事業部部長)に就任いたしました。

事務局の任務としては、①水明俳句会の活動をいかにスムーズに進めることができるかを考えて議題を作成し、幹事会において話し合ってもらうこと、②話し合いの結果を幹事会のメンバーにフィードバックし、評価と反省点を次の活動計画に生かし、水明俳句会のステップアップにつなげること、を念頭に今後も役目を担いたいと思っております。

編集部

(保坂翔太)

水明の編集は、石山かつ子、大塚茂子、野田静香、丸山マシミ、大村節代の五人で行っています。会員皆様とは、赤い糸で結ばれていると思っております。どうぞ、ご要望やご提案等が、おありの折には何なりとお寄せ下さいませ。今年もよろしくお願い致します。

(大村節代)

水明

令和六年一月号
通巻一一二〇号
令和六年一月一日発行

発行所

水明俳句会
〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇一二
電話 048-822-1474

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一一、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替 〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人 山本 鬼之介

印刷所 中央美版

「新春俳句大会」参加申込書

〈申込締切 1月25日(木)〉

新春俳句大会 2月1日(木)	会費 ¥1,000円	出席します
-------------------	------------	-------

※「出席します」を○で囲んでください。

※受付時間・投句締切時間をご確認下さい。

上記参加費を添えて申し込みます。

2024年1月 日

住所	〒		
氏名		電話	()

(申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21)
水明俳句会

[緊急連絡先電話番号]

電話番号	()
氏名	

※緊急時に備えて緊急連絡先電話番号をお届けください。緊急時のみに使用し他の用途には使用いたしません。

きりとりせん

季音 雪月花

令和六年

三月号 一月二十五日締切

※雪・月・花の該当欄を赤丸で囲む事

氏名(併号)

題

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所〒

氏名

年齢

きりとりせん

水明集

令和六年
四月号 一月二十五日締切

都市又は府県名

氏名(俳号)

最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意)

この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作つて使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

氏名

住所

年齢

山紫集

令和六年

四月号 一月二十五日締切

氏名(俳号)

一月の兼題 「初日」 (傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を

使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って

使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所

氏名

年齢

水 明 通 信

通信欄 (近況・感想など)自由に書き下さい

送り先 〒三三〇・〇〇六四 さいたま市浦和区岸町四十一番二 水明発行所

	都市又は府県名
	姓並びに俳名

新誌友紹介 下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒 -		
氏名		電話番号	- -

季音抄

山本鬼之介

黒々と石の撫で牛七五三
たれを待つ紫檀の机冬座敷
近松忌よよと囃みたる紅返し
秋日和遠師の句碑を繰り返し
ひとり佇つ霧の栈橋遠汽笛
田仕舞の煙地を這ふ夕間暮
行く秋や「あやとりばし」の朱のうねり
一乗寺下り松こそ冷まじや
綿虫に思慕の重さや人恋し
底紅や兵死する時「おかあさん」
冬蝶の蔵の庇にそれつきり
露天湯に音なく霧の寄り着きぬ
一枝の影を映して冬障子
往きたきは月の都よ兎抱く
いまいちど兎抱きしめ転校す
何処までも月の付きくる神の旅
冬の夜のうす紫の抱き枕
村中の男が化粧ふ秋祭

山中みどり
柚木治子
由良ゆら女
網野月を
石井喜恵
石山かつ子
松井由紀子
正木萬蝶
梅澤佐江
大場順子
松宮保人
町野広子
原田秀子
染谷風子
横山君夫
渋谷さいち
中野 疆
河野はるみ

今月のはてな？

蔓荊 (はまごう・はまぼう)

障 (みは) る

瘡 (こ) る

詞牌 (しはい)

岨道 (そわみち・そはみち)

虚仮 (こけ)

解 (はしけ)

梁 (うつぱり)

客家帽 (はつかぼう)

嗽 (うがい)

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：

(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、
ご用の方は 時間内をお願いします。)

水 明 抄

山本鬼之介

風格の満つる盆栽後の月
刈田道夕陽の中を下校生
一頭の秋の蝶ゆく草の果て
衣被剥いて差し出す賢夫人
奇人住む木戸に絡まる烏瓜
野路ゆけば廃れ地蔵に菘こぼる
天平の風鐸揺るる空高し
エプロンの似合ふ女将や衣被
秋夕べ虚空とよもす寺の鐘
子が親に渡すバトンや秋高し
車長持庭に引き出す秋土用
仕舞田に煙ひとすぢ暮の秋
すれちがふ甘き香りや龍田姫
古民家の上がり框に秋の蝶
自転車タイヤに秋を満タンに
柏手の響き安らか菊日和
釣人が独りの時を黄鶴鶴
山粧ふ吾も負けじと装へり

岡田宣子
反町修
菅原真理
菅原卓郎
小林京子
篠崎紀子
池田珪子
清水桂子
山岸久美子
新曆文
梅澤輝翠
西幅公子
阿部幸代
元田亮一
越田栄子
丸屋詠子
皆川更穂
千坂平通

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂木和子 小林京子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山中みどり 青木鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明昇 曲淵徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井喜恵 反町恵修
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木萬蝶 石田慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本早苗

水 明

令和六年一月一日発行 毎月一日発行

(第九十七卷 第一号)

定価 一〇〇〇円